

山梨県南アルプス市

DOUDOU UEHATTA SITE

百々・上八田遺跡

畑地帯総合整備事業 白根地区農道1号線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012.3

南アルプス市教育委員会

山梨県南アルプス市

DOUDOU UEHATTA SITE

百々・上八田遺跡

畑地帯総合整備事業 白根地区農道1号線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012. 3

南アルプス市教育委員会

例言

1. 本書は山梨県南アルプス市上八田に所在する「百々・上八田遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は旭地帯総合整備事業 白根地区農道1号線の建設事業に伴って実施した。
3. 調査は平成22年8月2日から9月4日、および平成22年10月18日から12月24日にかけて行い、実質調査日数は575日であった。
4. 調査範囲は本調査に先立って行われた試掘調査結果に基づき、実質調査面積は1360㎡であった。
5. 調査は山梨県中北農務事務所の委託を受けて、南アルプス市教育委員会が主体となって行った。発掘調査に従事したのは以下の方々である。
秋山高之助 飯室めぐみ 市ノ瀬政次
加藤由利子 小林素子 桜井理恵 清水勇希 眞道みゆき 齋藤三郎 高畑美和 中川和哉 中澤 保 名取 茂 早川榮蔵 穂坂美佐子 山路宏美 山村隼人
6. 整理調査は平成23年度に行い、以下の方々に参加した。
飯室めぐみ 加藤由利子 小林素子

- 桜井理恵 塩澤宏紀 高畑美和 中込夢美
新津大地 山路宏美
7. 本書の編集・執筆は田中大輔（南アルプス市教育委員会 文化財課）が行った。
 8. 本書に掲載した地図は国土地理院発行1/25000「甲府」・「小笠原」、南アルプス市発行1/10000「南アルプス市全図」である。
 9. 発掘調査に伴う基準点の設定は昭和測量（株）、本報告書に使用した航空写真の撮影は（株）スカイサーベイ、出土遺物の実測およびトレスの一部については（有）松風ツールアート、出土遺物の保存処理については、（財）山梨文化財研究所にそれぞれ委託した。
 10. 発掘・整理調査に際しては以下の諸氏・諸機関にご指示、ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。（敬称略・50音順）
山梨県教育委員会学術文化財課
山梨県埋蔵文化財センター
 11. 本書に関わる出土遺物ならびに写真・記録図面類は南アルプス市教育委員会において保管している。

凡例

遺構凡例

1. 遺構の縮尺は調査区全体図1/500、遺構配置図1/250、竪穴住居址・土坑1/40、竪1/20・1/40、溝1/40・1/80を基本とした。同一挿図中の平面図に対して断面図の縮尺を2倍としたものがある。
2. 遺構断面図中の「325.1」等の数値は標高を表し、単位はメートルである。
3. 挿図中の北方位はすべて国家座標を基にした座標北である。磁北は6°10′西偏する。遺構挿図はすべて座標北もしくは座標東を上にした。
4. 遺構断面図において、基本土層はスクリーントーンで示したが、頻繁になる場合は省略した。これ以外に用いたトーンは以下のとおり。
火床・焼土範囲：
溝：
攪乱：
5. 本書においては、便宜上遺構に以下に示すような略称を用いた。分類基準は以下のとおり。
SI（住居址）プランが方形又は方形に類する形状をとるもの。
P（ピット）種別、掘建自築物址の柱穴等、遺構に伴う穴。
SD（溝址）プランが溝状を呈するもの。
SK（土坑）土に穿たれた穴で上記以外のもの。
6. 遺構の名称は、原則として種類別に確認順に付したものを基本とするため、その所属時期、位置とは無関係である。
7. 土坑計測表の規模、標高の単位はmである。

遺物凡例

1. 遺物の縮尺はすべて1/3で示した。
2. 土器等回転体に近い遺物の実測に際しては四分劃法を用い、遺物の右前半1/4を切り取った状態で左側1/2に外面、右側に1/2に断面及び内面を記録した。残存状況によっては遺物の中心を算出し、180°回転して作図した。また、状況によっては外形・断面等を任意の回転で付したものもある。
3. 須臾器は断面を黒く塗りつぶした。灰釉陶器は断面にスクリーントーンを施した。これ以外に用いたトーンは以下のとおり。
黒色処理： 炭化物の付着：
施釉範囲：
4. 回転体にならない遺物、また破片資料であるため推定径の算出不能な土器の実測に際しては、側面（断面）を中心に左側に外面、右側に内面を示した。拓影図に關しても同様の作図に依った。
5. 遺物観察表における計測単位はすべてcmである。また、括弧で示した計測値は、推定値若しくは残存最大値である。
6. 遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帳』に準拠して付与した。
7. 挿図中の遺物番号と写真図版、遺物観察表中の遺物番号は一致する。

目 次

例言・凡例
目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	5
第3章 検出された遺構と遺物	9
第4章 総括	51

参考引用文献
図版
報告書抄録・奥付

挿図目次

第1図 調査区の位置	— 3	第27図 S115測線図(2)	— 28	第48図 S113出土遺物	— 40
第2図 遺跡の立地と環境	— 4	第28図 S116測線図	— 29	第49図 S114出土遺物	— 40
第3図 周辺の調査と調査区全体図	— 7	第24図 SK02測線図	— 30	第46図 S115出土遺物	— 41
第4図 基本層序	— 8	第25図 SK03測線図	— 30	第47図 S116出土遺物	— 42
第5図 調査区1区・2区 ・3区遺構配置図	— 14	第26図 SK04・05測線図	— 31	第48図 SK02出土遺物	— 42
第6図 調査区4区・5区遺構配置図	— 15	第27図 SK09~18	— 32	第49図 SK03出土遺物	— 43
第7図 S101測線図	— 16	・SD04・SD05測量図	— 32	第50図 SK04出土遺物	— 43
第8図 S102・SK19測量図	— 17	第28図 SK01・SD01測量図	— 33	第51図 SK05出土遺物	— 43
第9図 S103測量図	— 17	第29図 SD02測線図	— 33	第52図 SK06出土遺物	— 43
第10図 S104測線図	— 18	第30図 SD03測線図	— 34	第53図 発見された遺構の分布	— 52
第11図 S105測線図	— 18	第31図 S101出土遺物	— 35	第54図 指定される遺跡のひろがり	— 53
第12図 S106・SK06 ・SK07・SK08測量図	— 19	第32図 S102出土遺物	— 35		
第13図 S107測線図	— 20	第33図 S103出土遺物	— 35		
第14図 S108測線図	— 21	第34図 S104出土遺物	— 35		
第15図 S109測量図	— 22	第35図 S105出土遺物	— 36		
第16図 S110測量図	— 23	第36図 S106出土遺物	— 37		
第17図 S113測量図	— 23	第37図 S107出土遺物	— 37		
第18図 S111測線図	— 24	第38図 S108出土遺物(1)	— 37		
第19図 S112測線図	— 24	第39図 S108出土遺物(2)	— 38		
第20図 S112測線図	— 25	第40図 S109出土遺物	— 38		
第21図 S114測線図	— 25	第41図 S110出土遺物	— 38		
第22図 S115測量図(1)	— 27	第42図 S111出土遺物	— 39		
		第43図 S112出土遺物	— 39		

表目次

第1表 土坑計測表	— 13
第2表 遺物観察表(1)	— 44
第3表 遺物観察表(2)	— 45
第4表 遺物観察表(3)	— 46
第5表 遺物観察表(4)	— 47
第6表 遺物観察表(5)	— 48
第7表 遺物観察表(6)	— 49
第8表 遺物観察表(7)	— 50

図版目次

図版1 調査地点透景(南より) 調査区透景(西より)	図版17 S114遺物出土状況(西より) S115(西より)
図版2 調査区1区全景(南より) 調査区3区全景(南より) 調査区2区 東側トレンチ調査状況(北より) 調査区2区 東側トレンチ土層堆積状況	図版18 S115竪(西より)
図版3 調査区4区・5区全景(上方が北)	図版19 S116(西より) S116竪(東より)
図版4 S101(西より) S101竪(北西より)	図版20 SK02(東より) SK03竪(東より)
図版5 S102(西より) S102遺物出土状況(西より)	図版21 SK04・SK05(北より)
図版6 S103(西より) S103竪(西より)	SD04・05/SK09~12・15~16(西より)
図版7 S104(西より)	図版22 SK09(西より) 調査区透景 SD02(東より)
図版8 S105(西より) S105竪(西より)	図版23 SD01(西より) SD03(南より) SD03土層堆積状況(南より)
図版9 S106・SK06(西より) S106竪(西より)	図版24 出土遺物 S107-2 S105-1 S105-5 S106-1 S106-2 S107-1 S107-2
図版10 S107(北より) S107竪(西より)	図版25 出土遺物 S107-3 S107-4 S107-6 S108-1 S108-2 S108-3 S108-4 S108-6
図版11 S108(北より) S108竪(西より)	図版26 出土遺物 S108-9 S108-11 S108-13 S108-15 S108-16 S109-2 S11-2
図版12 S108遺物出土状況(北西より)	図版27 出土遺物 S111-3 S112-2 S112-3 S112-8 S113-1 S113-2 S113-3 S113-7
図版13 S109(西より) S110(北より)	図版28 出土遺物 S114-1 S115-1 S115-2 S115-5 S115-6 S116-2 S116-4 S116-9
図版14 S111(南より) S111竪(南より)	図版29 出土遺物 S116-10 S116-12 SK02-1 SK02-2 SK02-4 SK03-3 SK03-7
図版15 S112(西より) S112竪(北西より)	図版30 出土遺物 S106-5 S107-11 S107-12 S108-27 S108-28 S108-29 S109-4 S110-2 S116-15 SK04-6
図版16 S113(北より) S114(西より)	

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成21年9月8日、南アルプス市教育委員会は、南アルプス市上八田地区における畑地帯総合整備事業白根地区の農道1号線建設に際して、山梨県中北農務事務所長から埋蔵文化財の有無について照会を受けた（中北農第2243号）。

これを受け、南アルプス市教育委員会は平成21年9月15日～17日、当該計画予定地内の埋蔵文化財の有無を確認するため、文化財保護法第99条第1項に基づく試掘確認調査を実施した。

その結果、平安時代前半の遺構・遺物の検出を確認。平成21年9月28日、工事着工に際しては、埋蔵文化財について記録保存等保護措置が必要な旨、結果を山梨県中北農務事務所長に回答した（南ア教文9-23号）。

これに基づき、南アルプス市教育委員会と山梨県中北農務事務所は、本調査を行うべき範囲について協議し、最終的な本調査予定範囲の確定のため11月24日に補足調査を実施した後、平成22年6月30日に協定書を締結し、後述の日程で埋蔵文化財の記録保存を目的とした発掘調査を実施するに至った。

第2節 調査の方法

調査に際してはグリッド法を用い、調査予定地をカバーするように5mメッシュを基本とする国家座標Ⅷ系に即したグリッドを設定した。基準点の設置はGPSに拠った。

調査は重機により表土を除去した後、人力により確認面を精査し、遺構確認作業を行なった。表土から遺構確認面までの深さは概ね30～50cm程であった。

竪穴住居址の調査に際しては原則として四分割法を採り、2本の直交するセクションラインを設定、市松模様状に土層観察用のベルトを残して覆土を除去した。土層観察用のベルトは土層断面図を1/20で作成後取り除いた。遺構平面図は主に光波測量による遺構測量システムにより、1/20で作成した。竈についても同様としたが、一部ラジコンヘリコプターによる空中写真測量により補充した。

土坑については覆土を二分割し、まず半分の覆土

を除去した。その後、覆土の半裁によって生じた覆土断面の観察を行ない、土層断面図を1/20で作成した後発掘した。また、必要に応じてエレベーション図を1/20で作成した。平面図の作成要領は竪穴住居址と同様である。正し、土層の観察、平面図の作成後に土層断面図・エレベーション図の作成を行わず、遺構の出土レベルを記録してこれに替えた場合もある。溝に関しては上坑に準じて処理した。

第3節 調査の経過

調査に際しては、便宜上調査区を5区に分けて実施した。調査地点の現況は、ブドウ畑・カキ畑・サクランボ畑といった果樹園であったが、調査はまず、既に果樹等の撤去が終了していた1区並びに3区から着手した。両区の調査は、平成22年8月2日に開始し9月4日に終了した。

調査の開始にあたり、8月3日には文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査に着手した旨、山梨県教育委員会に報告した（南ア教文第8-8号）。

1・3区の調査終了後、他の調査区についてはブドウ、カキ等の収穫を待ち、果樹の伐採、ブドウ棚の撤去を行った後に調査を実施することとし一旦機材等を撤収した。なお、この間を利用し、基礎的な図面の整理作業等を実施している。

残る調査区のうち、4区ならびに5区の調査は、ブドウの収穫、ブドウ棚の撤去を待って10月18日に着手した。その際、遺構を精査したところ、5



写真1 調査風景

区の北半で遺構の検出が途絶えたため、これ以北の試掘確認調査で遺構・遺物が検出されていないことに鑑み、5区北半以北の調査は行わなかった。

これと平行して、これまで果樹により試掘調査の行えなかった2区において確認調査を行ったところ、明確な遺構の検出がみられず、この部分については、試掘トレンチにおいて土層堆積状況を記録し調査終了とした。

4・5区の調査は、12月24日まで継続し、同日終了した。

後述するとおり、今回の調査において最終的に検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

出土遺構：平安時代前半 竪穴住居址 16軒



平安時代前半 溝5条

平安時代前半 土坑19基

出土遺物：平安時代前半 土師器・須恵器・鉄製品（刀子、紡錘車等）

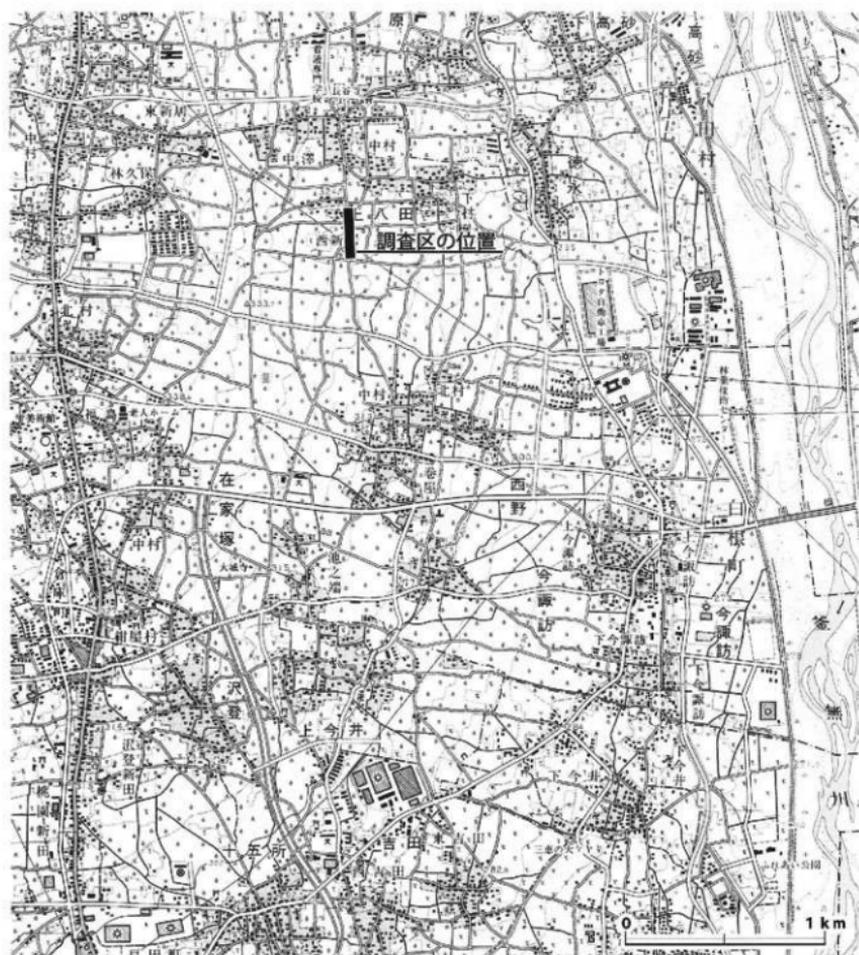
調査終了後、平成22年12月27日には、山梨県教育委員会に終了報告をおこなうとともに、遺物保管証の提出をおこなった。（南ア教文第12-23号）、また同日南アルプス警察署長に対し、遺失物法第4条第1項に基づく届出をおこなった。

その後、1月末まで、機材の撤収、洗浄、出土遺物の整理確認作業等を実施した。

整理調査は平成23年度実施し、本報告書の刊行に至った。



写真2 調査風景



第1図 調査区的位置



第2図 遺跡の立地と環境

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地

本遺跡は、平成15年4月1日、山梨県の釜無川(富士川)右岸地域6町村が合併して誕生した南アルプス市に立地する。市の総面積264.06平方km、領域は東西29.6km、南北11.8kmの範囲に広がり、山梨県の総面積の約5.9%を占める。市の東端は、釜無川左岸に占地する市域の飛地部分にあり、西端は、大仙丈ヶ岳(2975m)であり長野県に接する。市の北端は、駒津峰(2752m)付近で、南端は、釜無川に滝沢川、坪川等が合流する地点となる。市の最高点は北岳山頂の3193m、最低点は市の最南端にあたり標高約241mを測る。

市の領域は甲府盆地における釜無川(富士川)右岸地域のほぼ全てを占める。これは、概ね山梨県の最西部、所謂狭谷(きょうさい)地域、西郡(にしごおり)地方などと呼称されてきた地域に相当し、町村合併以前より地形的にも文化的にも一体的に捉えられてきた地域といえる。

市域西部は、国内第2位の標高(3193m)を誇る南アルプス連峰(赤石山脈)の主峰北岳を擁し、その前衛である巨摩山地を含め急峻な山岳が卓越する。また、櫛形山を中心とした巨摩山地と南アルプス連峰の間には、所謂「糸魚川-静岡構造線」が市域を縦断する。

市域東半は、これら急峻な山岳を流下してきた河川の営為によって形成された複合扇状地が発達する。その中でも、御勅使川の河川作用によって形成された御勅使川扇状地は、日本有数の扇状地として著名である。市域の東辺は一部対岸に飛地を有するが、概ね釜無川に画され、これら巨摩山地由来の複合扇状地群が到達し得なかった市城南東辺には、釜無川の氾濫原がひろがっている。

本遺跡が占地する御勅使川扇状地は、面積約4000ha、東西約7.5km、南北約10kmに及び、その規模と美しい扇形から日本有数の扇状地として知られる。この広大な扇状地上、砂礫の厚く堆積したその扇尖部は地下水位が極端に低く、砂礫土壌で排水がよいため、古来から俗に「月夜でも焼ける」といわれるほどの広大な旱魃地帯を形成してきた。

扇状地の西辺は、南アルプスの前衛、巨摩山地によって規定され、東辺はその時々釜無川の流路とせめぎ合う。

御勅使川は、その流路を変遷し、現在は扇状地の北辺に沿うように東流しているが、歴史的に見れば、扇頂を視点としてダイナミックな流路の変遷があったことが明らかとなっており、現在も扇状地の上にはいくつかの旧川道を確認することができる(今福2004a)。

遺跡の立地する南アルプス市上八田は、隣接する南アルプス市徳永や榎原の一部とともに、古代の御勅使川本流であったとされる、いわゆる【御勅使川南流路】と、武田信玄の治水伝説が残り、近代まで河道として機能していた、いわゆる【前御勅使川】とに挟まれた広大な中州状の空間に占地する。この領域の東辺は、御勅使川扇状地を釜無川が浸食してきた侵食崖に画され、釜無川氾濫原と御勅使川扇状地上との比高は約20mに及ぶ。このように周囲を河川・河道に囲まれた上八田、および崖線に位置する部分の徳永、榎原は、地理的にも歴史的にもひとまとまりの地域としてとらえることができる。

この領域の東端からは、縄文時代後期および古墳時代後期～奈良時代の集落跡が発見されており、まだ水田を志向しない時代、または集落の規模が小規模な場合にあっては、崖線下の水場に湧水を汲みに

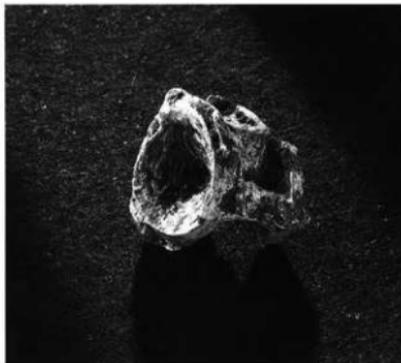


写真3 タイの椎骨
百々・上八田遺跡(縄文時代後期)

いくことができれば、御勅使川の流路からはずれ、釜無川の浸食崖の上に立地するこの領域は、水害に遭い難い、当時の人々にとってはむしろ安定して集落の営める場所だったといえる。

釜無川の浸食崖に沿った上八田下村遺跡①や上八田堂前遺跡②では、古くから縄文時代前期の配石遺構や遺物が出上ることが知られてきた。近年の調査でも、同領域の東端に位置する徳永・御崎遺跡④・⑨から、縄文時代後期の遺物や配石遺構が検出され、また百々・上八田遺跡の東端域からも個人住宅の浄化槽設置に伴って実施された調査⑩により、同じく縄文時代後期の配石遺構や敷石住居が検出されており、この領域の東半域に広く該期の遺跡が分布することが明らかとなっている。なお⑩地点の調査では敷石住居に伴って海洋魚であるタイの椎骨が発見され、先史時代の流通や地域間交流を考える上で注目を集めた。

また、徳永・御崎遺跡の別地点⑧からは、釜無川(富士川)西岸地域では検出例の少ない、古墳時代後期の集落址が検出されているほか、坂ノ上姥神遺跡⑥では奈良時代の遺構・遺物が発見され、ここまで点々と人の営みの痕跡をたどることができる。

その後、平安時代(9世紀後半)になると集落は、同領域において突如としてインフレーション的に展開をはじめ、第3図に示したとおり、榎原・天神遺跡③や坂ノ上・姥神遺跡⑥をはじめとして、上八田を中心とするこの領域のほぼ全域で該期の遺構や遺物を見つけることができるようになる。

特に、甲西バイパス(中部横断道)の建設に伴って行われた発掘調査⑤では、遺構が南北840mの範囲に途切れなく連なり、調査した範囲内だけでも、平安時代の竪穴住居址253軒、そのほか掘立柱建物址、溝跡など多くの遺構、また土器などのほか、緑釉陶器、鉄製品、鉄滓、鍾、銅鏡(八稜鏡)といった多彩な遺物が発見され、古代甲斐国でも屈指の大遺跡であることが明らかとなっている。

さらに、この調査では100頭を越すと推定される牛馬骨が発見され、中には馬が丁寧に埋葬された状態で発見されるなど注目を集めた。この地域には、高尾穂見神社の男神鏡像の銘文から、遅くとも中世には成立していたことが明らかとなる「八田牧(はっ



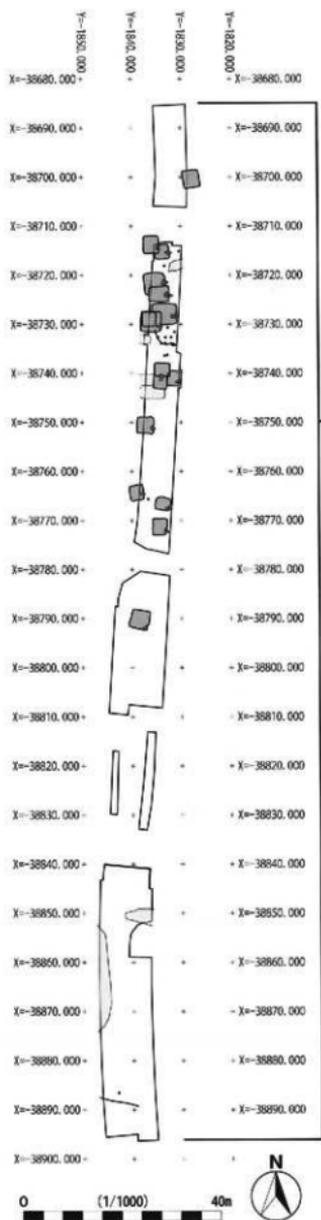
写真4 木造十一面観音立像
(長谷寺 平安時代)



写真5 男神鏡像
(高尾穂見神社 鎌倉時代)

天福元年(1233)の銘とともに、「八田御牧北高尾」とみえる

※ 番号は第3図にプロットした調査地点の番号に対応する。以下同様。



第3図 周辺の調査と調査区全体図

たのまき)」と呼称された「牧」が設けられていたことが知られるが、八田牧の先駆けとなるような施設の中核をなすような集落のあり方が注目された。

なおこのような、領域の平安時代の隆盛を示すように、領域の中心という象徴的な位置には、現在も長谷寺の木造十一面観音立像（11世紀）が安置されている。

今回、発掘調査を行った範囲は、甲西バイパス地点の南東約550mに位置する。調査地点の標高は概ね324mを測り、現在本調査区との比高3m程の谷状の地形として確認できる古代の御勅使川、所謂御勅使川南流路に南面する。後述するように、今回の調査では、平安時代の集落が9世紀前半から半ばに出現し、少なくとも10世紀後半まで継続することが明らかとなった。検出された領域と遺構の時期に鑑みれば、このような本遺跡のあり方



写真6 土坑から発見された4体の馬
(百々遺跡 甲西バイパス地点 平安時代)

山梨県埋蔵文化財センター (2002)

は、おおむね甲西バイパス地点と同様といえるが、御勅使川南流路は本遺跡が営まれた時期には、まさに御勅使川の本流であったことが指摘されており（今福2004a）、本遺跡が同流路の存在を意識して選地されたことをうかがわせる。

第2節 調査区の土層

今回の調査実施以前、遺跡の現況はブドウ、カキ、サクランボを栽培する果樹畑であった。

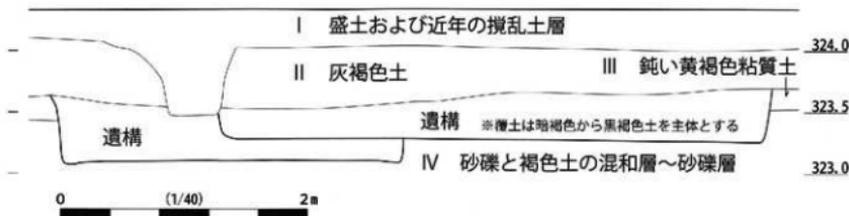
そのため、表土は、所によって耕土の入れ替えや客土が行なわれ、剪定した枝などを焼却するために穿たれた穴によって攪乱される。またブドウ畑では、設置したブドウ棚の支柱を固定するために地中深く埋設されたアンカーによる攪乱が多く見られた。

今回の調査区によって確認された基本層序は下図のとおりである。第Ⅰ層とした表土および近年の攪乱土層上層下に第Ⅱ層とした灰褐色土が堆積する。通常本遺跡周辺では、この直下に暗褐色～黒褐色を呈し、古代の遺物を包含する土層が確認できる場合が多いが、今回の調査区では一部を除き安定的な堆積が見

られず、下に例示した部分のように全く確認できない箇所も多くあった。ただし、今回検出された遺構覆土の主体は、基本的にこの黒褐色系の土層を出自とするものに占められる。

次に堆積する第Ⅲ層とした鈍い黄褐色粘質土層上面が今回の調査の遺構確認面となっている。本層下には第Ⅳ層とした砂礫と褐色土の混和層～砂礫層が堆積するが、第Ⅲ層の堆積も特に調査区4区南半から以南では不安定となり、この部分では第Ⅳ層上面が遺構確認面となっている。調査区では、南面する御勅使川の旧河道（御勅使川南流路）に向け5～1区へと順次標高を下げ、1層以南（＝旧河道）においては、現在も表層から砂礫層となる。

324.5



第4図 基本層序

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 竪穴住居址(S1)

S101 3区、 $x = -38790.3$ 、 $y = -1838.6$ を中心に検出された。遺構の北西隅を損傷により失うが、他の遺構とは切り合い無く単独で存在する。主軸を $N-101^{\circ}00'-E$ にとり、確認面での規模は東西3.74 m、南北3.80 mを測る。床面における規模は、東西3.36 m、南北3.58 m。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。確認面から床面までの深さは0.25 m、床面標高は323.10 mを測る。竈は、住居址南東隅において1基確認され、規模は主軸方向0.77 m、横幅1.79 mを測る。覆土は自然堆積で3層に分けられる。遺物の総量は少ない。竈付近から検出した甕、羽釜のほか杯を図示した。今回の調査範囲で検出された中では、最も新しい様相を呈し、唯一10世紀後半代の年代が与えられる。

S102 4区、 $x = -38764.2$ 、 $y = -1838.3$ を中心に検出された。切り合い無く単独で存在する。主軸を $N-82^{\circ}00'-E$ にとり、大部分が調査区外にあるが、確認面での規模は東西0.88 m以上、南北3.12 mを測る。床面における規模は、東西0.62 m以上、南北2.99 m。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。確認面から床面までの深さは0.20 m、床面標高は323.32 mを測る。竈は、住居址東壁南寄りにおいて1基確認され、規模は主軸方向0.78 m、横幅0.96 mを測る。また竈右側には浅い皿状のピット(P01)を有する。覆土の最下層は、竈の崩壊によって生じたと推察される火床由来の焼土を主体とした層が広範囲に堆積する。竈右脇P01から、甕2個体以上が集中して検出された。図示し得るような杯類は検出されなかった。

S103 4区、 $x = -38751.0$ 、 $y = -1837.2$ を中心に検出された。切り合い無く単独で存在する。主軸を $N-92^{\circ}00'-E$ にとり、遺構西半が調査区外にあるが、確認面での規模は東西2.00 m以上、南北3.26 mを測る。床面における規模は、東西1.68 m以上、南北3.00 m。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。確認面から床面までの深さは0.21

m、床面標高は323.31 mを測る。竈は、住居址東壁南寄りにおいて1基確認され、規模は主軸方向1.02 m、横幅1.14 mを測る。また竈右側には浅い皿状のピット(P01)を有し、全体に周溝が廻る。覆土は自然堆積で5層に分けられる。遺物の総量は少なく、破片資料が多い。

S104 4区、 $x = -38770.9$ 、 $y = -1834.5$ を中心に検出された。切り合い無く単独で存在する。主軸を $N-87^{\circ}00'-E$ にとり、確認面での規模は東西2.90 m、南北3.28 mを測る。床面における規模は、東西2.87 m、南北3.24 m。確認面から床面までの深さは0.05 m、床面標高は323.33 mを測る。床面は地山の礫混層で平坦でなく、硬化面等も認められない。竈は、住居址南東隅付近において1基確認され、規模は主軸方向0.92 m、横幅1.52 mを測る。遺構の遺存状況が悪く、遺物は少ない。

S105 4区、 $x = -38766.5$ 、 $y = -1833.6$ を中心に検出された。切り合い無く単独で存在する。主軸を $N-103^{\circ}30'-E$ にとり、確認面での規模は東西3.13 m、南北2.64 mを測る。床面における規模は、東西2.97 m、南北2.44 m。確認面から床面までの深さは0.09 m、床面標高は323.32 mを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。竈は、住居址南東隅付近において1基確認され、規模は主軸方向1.14 m、横幅1.36 mを測る。覆土は自然堆積で4層に分けられる。遺物の総量は少ない。

S106 4区、 $x = -38715.2$ 、 $y = -1833.7$ を中心に検出された。SI13及びSK06に切られる。主軸を $N-86^{\circ}00'-E$ にとり、確認面での規模は東西2.92 m、南北2.97 m以上を測る。床面における規模は、東西2.77 m、南北2.69 m。確認面から床面までの深さは0.34 m、床面標高は323.22 mを測る。床面に貼床は認められないが、付近を中心に顕著な硬化面が認められる。竈は、住居址東壁南寄りにおいて1基確認され、規模は主軸方向1.05

m、横幅1.26 mを測る。覆土は自然堆積を呈し、覆土上半には基本層の流入が看取される。竈火床から図示した窠が出土したほか、南側周壁沿いで須恵器杯2個体が検出された。

S107 4区、 $x = -38721.9$ 、 $y = -1834.7$ を中心に検出された。SI15を切る。主軸を $N-83^{\circ}00'-E$ にとり、遺構西半が調査区外にあるが、確認面での規模は東西2.60 m以上、南北4.38 mを測る。床面における規模は、東西2.10 m以上、南北4.22 m。確認面から床面までの深さは0.26 m、床面標高は323.34 mを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。窠は、住居址東壁南寄りにおいて1基確認され、規模は主軸方向1.43 m、横幅1.15 mを測る。遺構の北東隅において不明瞭ながら周溝状の落ち込みを確認できる。また、竈左袖外側に、半円形の突出部が認められる。本址と切りあう土坑であった可能性も指摘できる。覆土は自然堆積で4層に分けられる。SI15を切るため、覆土に本址よりやや古い様相の破片群が混入する。

S108 4区、 $x = -38727.6$ 、 $y = -1833.5$ を中心に検出された。SI09に切られ、SI14を切る。主軸を $N-87^{\circ}00'-E$ にとり、確認面での規模は東西4.99 m、南北4.32 mを測る。床面における規模は、東西4.46 m、南北3.88 m。確認面から床面までの深さは0.38 m、床面標高は323.11 mを測る。床面に貼床は認められないが、竈周辺を中心に顕著な硬化面が認められる。窠は、住居址東壁南寄りにおいて1基確認され、規模は主軸方向1.34 m、横幅1.10 mを測る。竈右側に、浅い皿状のピット(P01)を有するほか、本址床面において、いくつかのピット(P02~04)を確認することができる。浅い周溝を南壁に沿って検出した。また、本址北壁付近で、一部被熱した床面が検出されている。なお、当地域の該期の竈穴住居址においては、竈右側(=住居址南東隅)に浅い皿状のピットを伴うことが多いが、本址においては、このピット(P01)の西端にさらに2基の小穴を作ることが特出される。遺構覆土は自然堆積で5層に分層できる。遺物は、竈右脇から住居址南壁沿って集中して検出された。多く

は、山上状況写真に示したとおり、想定される所謂棚状遺構や壁外屋内空間から「転落遺棄」されたような状況であることが看取される。

S109 4区、 $x = -38729.5$ 、 $y = -1835.3$ を中心に検出された。SI08及びSI14を切り、SD04に切られる。主軸を $N-91^{\circ}00'-E$ にとり、遺構西半が調査区外にあるが、確認面での規模は東西2.50 m以上、南北4.20 mを測る。床面における規模は、東西2.44 m、南北4.00 m。確認面から床面までの深さは0.25 m、床面標高は323.36 mを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。窠は、住居址東壁南寄りにおいて1基確認され、規模は主軸方向1.12 m、横幅1.40 mを測る。遺構覆土は自然堆積で3層に分けられる。遺構の遺存状況が悪いためか、遺物の総量は少ない。

S110 5区、 $x = -38700.3$ 、 $y = -1828.7$ を中心に検出された。検出された範囲では切り合い無く単独で存在する。主軸を $N-82^{\circ}30'-E$ にとり、遺構の大部分が調査区外にあり、確認面での規模は東西1.02 m以上、南北3.60 mを測る。床面における規模は、東西0.90 m以上、南北3.23 m。確認面から床面までの深さは0.35 m、床面標高は323.12 mを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。窠は、調査区外にあるものと推察され検出されなかった。本址西壁から南壁に沿って不明瞭ながら周溝を検出した。覆土は自然堆積で5層に分けられる。主要な部分が調査区外にあるため杯1点、鉄製品1点を図示したに留まる。

S111 4区、 $x = -38741.9$ 、 $y = -1834.1$ を中心に検出された。SI12、SI16、SK04、SK05を切る。主軸を $N-3^{\circ}00'-E$ にとり、確認面での規模は東西2.70 m、南北2.60 mを測る。床面における規模は、東西2.58 m、南北2.50 m。確認面から床面までの深さは0.09 m、床面標高は323.36 mを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。窠は、住居址北壁中央付近において1基確認され、規模は主軸方向1.43 m、横幅1.12 mを測る。遺物は竈付近を中心にまとまって検出される。

S I 1 2 4区、 $x = -38739.2$ 、 $y = -1833.9$ を中心に検出された。SI11に切られ、SI16及びSK05を切る。主軸を $N-91^{\circ}00'-E$ にとり、確認面での規模は東西3.10m、南北2.80mを測る。床面における規模は、東西2.99m、南北2.74m。確認面から床面までの深さは0.19m、床面標高は323.28mを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。竈は、住居址南東隅において1基確認され、規模は主軸方向0.78m、横幅0.92mを測る。遺構覆土は自然堆積で3層に分けられる。遺物の総量は少なく、破片資料が主体となる。

S I 1 3 4区、 $x = -38714.6$ 、 $y = -1834.9$ を中心に検出された。SI06を切る。主軸を $N-86^{\circ}00'-E$ にとり、遺構の大部分が調査区外にあるが、確認面での規模は東西1.06m以上、南北1.60m以上を測る。床面における規模は、東西0.83m以上、南北1.46m以上。確認面から床面までの深さは0.14m、床面標高は322.32mを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。竈は、住居址東壁南寄りにおいて1基確認され、規模は主軸方向0.72m、横幅0.56mを測る。覆土は自然堆積で6層に分けられる。喪底部と1・2として示した杯が、本址南東隅付近から転落したような山上状況を呈す。

S I 1 4 4区、 $x = -38729.0$ 、 $y = -1836.2$ を中心に検出された。SI08、SI09、SD04に切られる。主軸を $N-92^{\circ}00'-E$ にとり、遺構の大部分が調査区外にあり、また他の遺構に切られ判然としないが、確認面での規模は東西1.24m以上、南北2.88mを測る。床面における規模は、東西1.15m以上、南北2.70m。確認面から床面までの深さは0.15m、床面標高は323.20mを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。竈は、他の遺構に切られるためか、確認し得なかったが、床面においてピット3基を検出した(P01～03)。

この内P01からは焼上の混和した粘質土とともに、土師器杯が複数破砕し、上部に径20cm程の礫が乗せられた状態で検出されている。遺構覆土は自然堆積で2層に分けられる。P01出土の遺物2点を図示した。

S I 1 5 4区、 $x = -38723.7$ 、 $y = -1834.4$ を中心に検出された。SI07に切られる。主軸を $N-88^{\circ}00'-E$ にとり、遺構の一部が調査区外にあるが、確認面での規模は東西3.49m以上、南北3.11mを測る。床面における規模は、東西3.38m以上、南北2.94m。確認面から床面までの深さは0.40m、床面標高は323.12mを測る。床面に貼床は認められないが、竈周辺を中心に顕著な硬化面が認められる。竈は、住居址東壁中央付近において1基確認され、規模は主軸方向1.72m、横幅1.20mを測る。竈の煙道は本址外に0.8m程延びる。煙道の側壁には顕著に被熱の痕跡がみられるが、煙道の底面では被熱して土壌が赤変した状態はほとんど有取できない。また、煙道の先には、本址竈に伴うと推察される径0.25m、深さ0.06m程の規模で、覆土に焼土、炭化物を含有するピットが1基検出される。このような煙道と浅いピットの関係は、平成16年に調査が実施された本遺跡の別地点において検出事例がある(南アルプス市教育委員会2005)。周溝は調査区南壁に沿って一部確認された。また、竈の右側には、棚状の施設を確認することができる。竈左側については、半円形のプランを有するやはり棚状の施設が確認できるが、こちらについては、SI07のケース同様、本址と切りあった上坑であった可能性も指摘できる。遺構覆土は自然堆積で8層に分けられる。遺物は竈周辺において集中して検出される。今回の調査範囲で検出された中では、もっとも古い様相を呈する遺構のひとつであり、9世紀前半から中ばの年代が与えられる。

S I 1 6 4区、 $x = -38741.30$ 、 $y = -1830.90$ を中心に検出された。SI11及びSI12に切られる。主軸を $N-89^{\circ}00'-E$ にとり、確認面での規模は東西2.42m以上、南北2.99mを測る。床面における規模は、東西2.38m以上、南北2.89m。確認面から床面までの深さは0.18m、床面標高は323.26mを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。竈は、住居址東壁南寄りにおいて1基確認され、規模は主軸方向1.40m、横幅0.74mを測る。竈の右袖筋には、解体された竈の構架材と推察される礫が集積される。また竈左袖外側におい

て長径0.65 m、短径0.79 m、深さ0.13 m程の楕円形のピット（P01）を1基検出した。遺構の遺存状態は必ずしもよくないが、出土状況写真に示したとおり、竈周辺から多くの遺物が出土した。

第2節 溝（SD）

SD01 1区南端付近、 $x=38850.6$ 、 $y=-1839.1$ から $x=38888.0$ 、 $y=1845.1$ にかけて検出された。検出された範囲では他の遺構と切り合わない。主軸は、 $N-78^{\circ}30'-W$ をとり、確認された規模は長さ6.20 m、幅0.39 m、深さ0.17 mで、最深部の底面標高は322.74 mを測る。断面U字状を呈し、覆上は砂礫を多く含む暗褐色粘質土に占められる。平安時代の土師器片が検出されたが小片のため図示し得なかった。

SD02 1区南端付近、 $x=38889.3$ 、 $y=1839.2$ を中心に検出された。検出された範囲では、他の遺構と切り合わない。主軸は、ほぼ東西方向をとり、確認された規模は長さ4.20 m、幅2.59 m、深さ0.30 mで、最深部の底面標高は323.35 mを測る。断面は浅いU字状を呈し、覆土は黒褐色粘質土を主体として2層に分けられる。遺物は検出されなかった。

SD03 1区調査区西壁に沿って、 $x=38853.8$ 、 $y=1845.9$ から $x=38872.8$ 、 $y=1845.9$ にかけて検出された。遺構の大部分が調査区外にあるものと推察されるが、検出された範囲では他の遺構と切り合わない。主軸は、検出された範囲ではほぼ南北方向をとるものと推察され、確認された規模は長さ18.76 m、幅1.45 m以上、深さ0.80 m程で、最深部の底面標高は322.50 mを測る。覆土は、遺構下半は水成堆積と見られる砂礫やシルトに占められ、上半は砂礫を含む黒褐色土に占められる。底面および側壁は、水流による侵食を受けたことが強く看取され、一部オーバーハンクしている部分等が確認される。遺物は、10世紀前半を主体とする土師器、須恵器片が主に覆土上半から検出されたが、小片のため図示し得なかった。

SD04 4区中央付近、 $x=38730.4$ 、 $y=1834.9$ から $x=38734.7$ 、 $y=1831.1$ にかけて検出され、

SI09を切り、 $SK11 \cdot 15 \cdot 16 \cdot 18$ に切られ、屈曲しながら調査区を横切る。確認された幅は0.32 m、深さ0.07 mで、最深部の底面標高は323.48 mを測る。遺物は検出されなかった。

SD05 4区中央付近、 $x=38735.2$ 、 $y=1830.9$ を中心に検出された。検出された範囲では他の遺構と切り合わない。主軸は、検出された範囲ではほぼ東西方向をとるものと推察され、確認された規模は長さ0.88 m、幅0.42 m、深さ0.13 mで、最深部の底面標高は323.36 mを測る。遺物は検出されなかった。

第3節 土坑（SK）

SK01 1区、 $x=-3886.6$ 、 $y=-1843.0$ を中心に検出された。切り合い無く単独で存在する。形状は不整形を呈し、検出された規模は東西0.90 m、南北2.29 m。確認面からの深さは0.09 m、底面標高は322.81 mを測る。断面形は不整な皿状の落ち込みとして検出される。底面に顕著な被熱の痕跡は認められないが、2層に分けられる覆土には焼土を含む。

SK02 4区、 $x=-38733.1$ 、 $y=-1837.3$ を中心に検出された。遺構の大部分が調査区外にあるものと推察されるが、検出された範囲では切り合い無く単独で存在する。形状は方形乃至長方形を呈するとみられ、検出された規模は東西1.15 m以上、南北1.88 mを測る。底面は平坦で、硬化面等は見られない。確認面からの深さは0.27 m、底面標高は323.35 mを測る。

SK03 4区、 $x=-38718.1$ 、 $y=-1830.6$ を中心に検出された。遺構の一部が調査区外にあるものと推察されるが、検出された範囲では切り合い無く単独で存在する。不整形を呈し、検出された規模は東西2.99 m以上、南北2.21 mを測る。確認面からの深さは0.29 m、底面標高は323.27 mを測る。断面形は不整な皿状の落ち込みとして検出される。底面に顕著な被熱の痕跡は認められないが、4層に分けられる覆土には焼土、炭化物を含み、特に遺構東半では、底面に炭化物が層を成して検出された。

SK04 4区、x = -38744.0、y = -1835.3 を中心に検出された。遺構の一部が調査区外にあり、SK05を切りSI11に切られる。形状は長方形を呈するものと推察され、検出された規模は東西4.00 m以上、南北2.21 mを測る。確認面からの深さは0.20 m、底面標高は323.20 mを測る。底面は北半においてはほぼ平坦、南半においては南に向かって傾斜する。硬化面等は認められない。

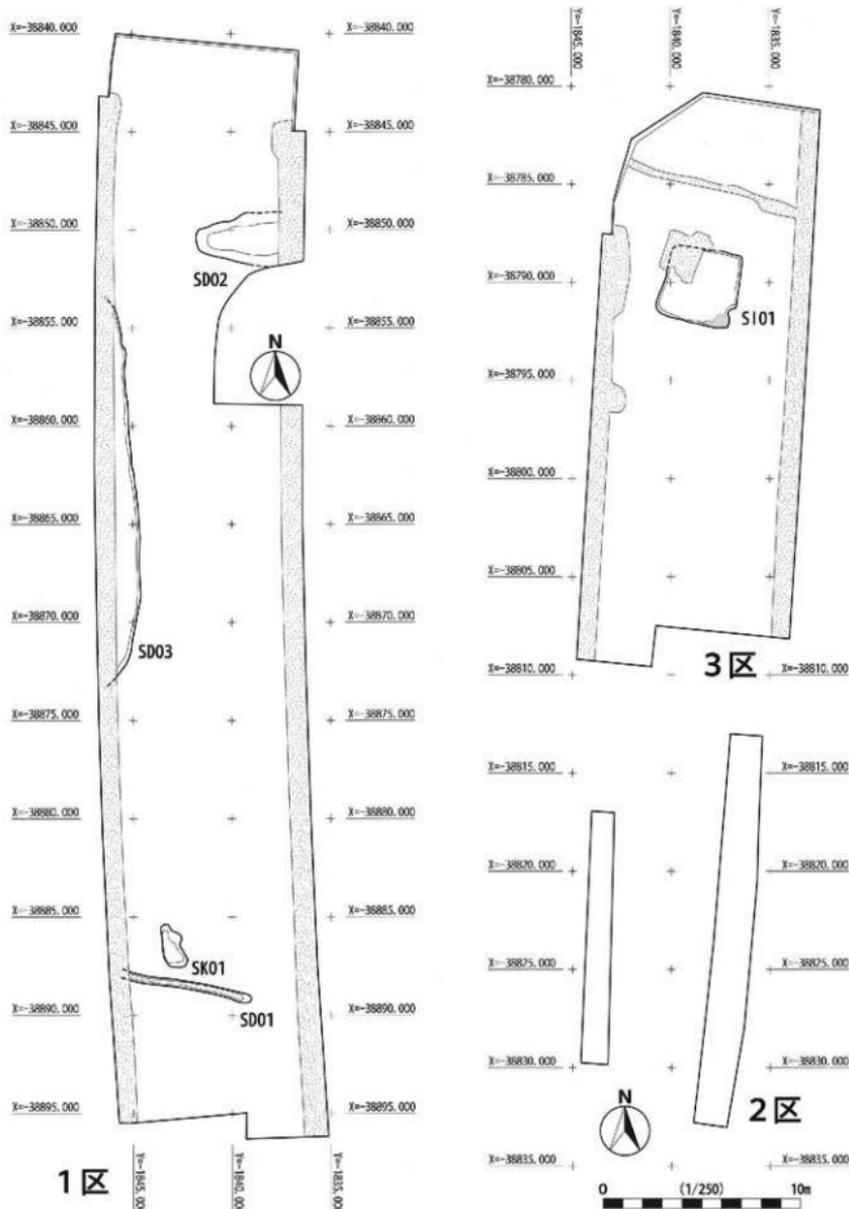
SK05 4区、x = -38740.7、y = -1836.9 を

中心に検出された。遺構の大部分が調査区外にあるものと推察され、SK04・SI11・SI12に切られる。形状は方形乃至長方形を呈するものと推察され、検出された規模は東西1.55 m以上、南北2.85 m以上を測る。確認面からの深さは0.08 m、底面標高は323.35 mを測る。底面は平坦で、硬化面等は見られない。

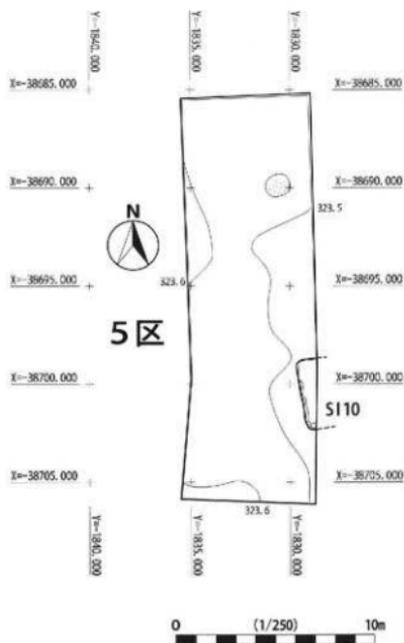
その他の土坑 検出されたその他の土坑の概要は以下の表のとおり。

遺構名	位置	形状	長軸	短軸	深さ	底面標高	切り合い	遺物
SK01	1区	不整形	2.29	0.90	0.09	322.81	なし	土師器片
SK02	4区	長方形?	1.15 以上	1.88	0.27	323.35	なし	土師器・須恵器
SK03	4区	不整形	2.99 以上	2.16	0.29	323.27	なし	土師器
SK04	4区	長方形?	4.00 以上	2.21	0.20	323.20	SI11に切られ、SK05を切る	土師器・須恵器 鉄製品
SK05	4区	長方形?	1.55 以上	2.85 以上	0.08	323.34	SI11、SI12、SK04に切られる	土師器
SK06	4区	楕円形	0.88	0.69	0.47	323.08	SK06を切る	鉄滓
SK07	4区	楕円形	0.82	0.54	0.10	323.46	なし	なし
SK08	4区	楕円形	0.64	0.56	0.57	323.06	なし	土師器・須恵器片
SK09	4区	楕円形	0.88 以上	0.64	0.53	322.99	なし	土師器片
SK10	4区	円形	0.52	0.49	0.26	323.25	なし	土師器片
SK11	4区	円形	0.16	0.17	0.21	323.31	SD04を切る	土師器片
SK12	4区	円形	0.12	0.11	0.02	323.54	なし	なし
SK13	4区	円形	0.23	0.21	0.04	323.35	なし	なし
SK14	4区	不整形	0.75	0.60	0.42	323.00	なし	土師器片
SK15	4区	楕円形	1.12 以上	0.72	0.33	323.16	SD04を切る	土師器片
SK16	4区	円形	0.46	0.45	0.30	323.20	SD04を切る	土師器片
SK17	4区	楕円形	0.56	0.40	0.49	323.01	なし	土師器片
SK18	4区	円形	0.14	0.13	0.06	323.43	SD04を切る	なし
SK19	4区	楕円形	0.83	0.59	0.10	323.44	なし	なし

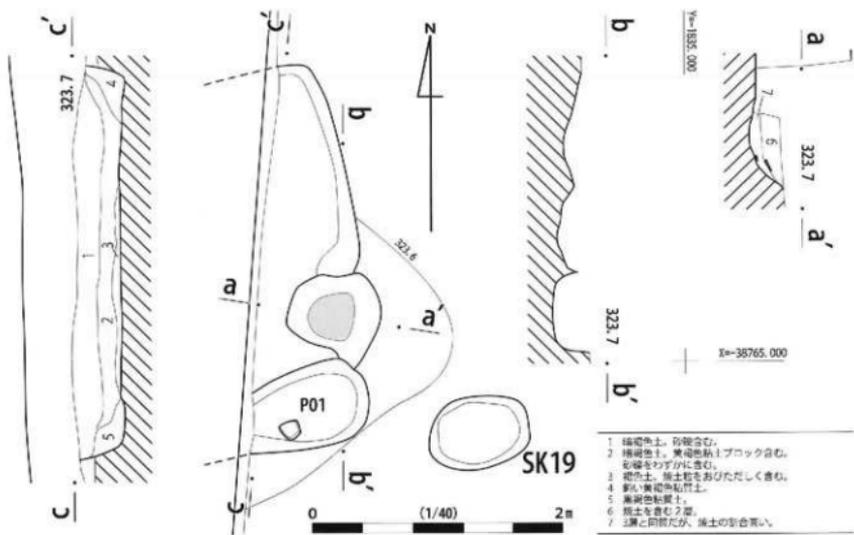
第1表 土坑計測表



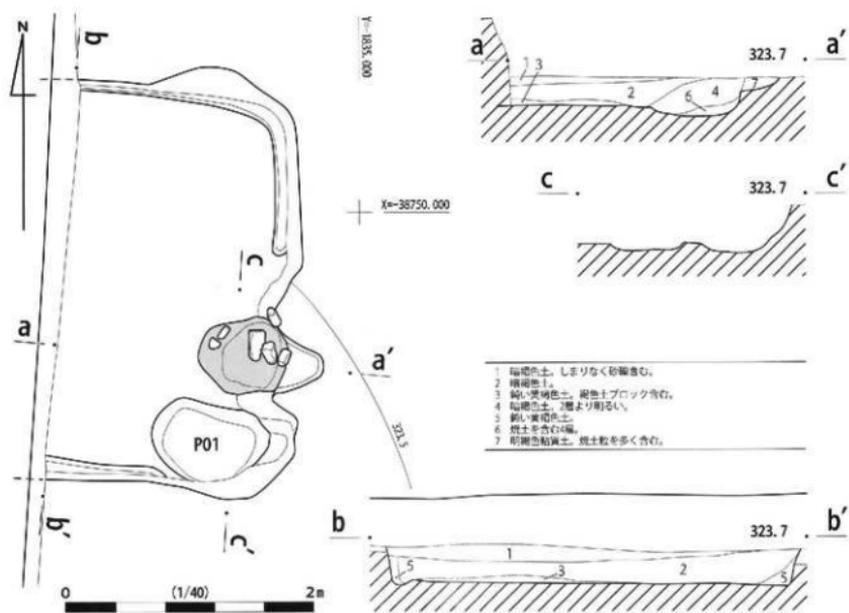
第5図 調査区1区・2区・3区遺構配置図



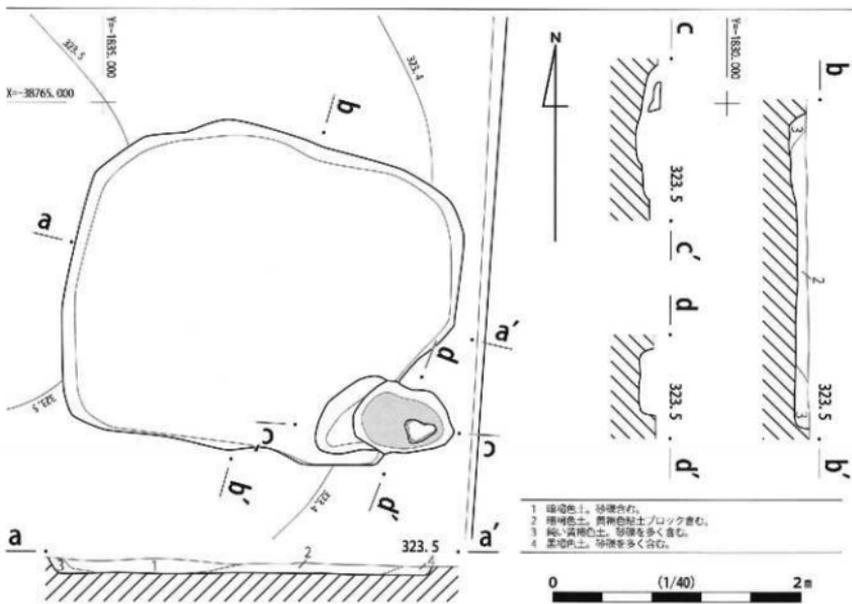
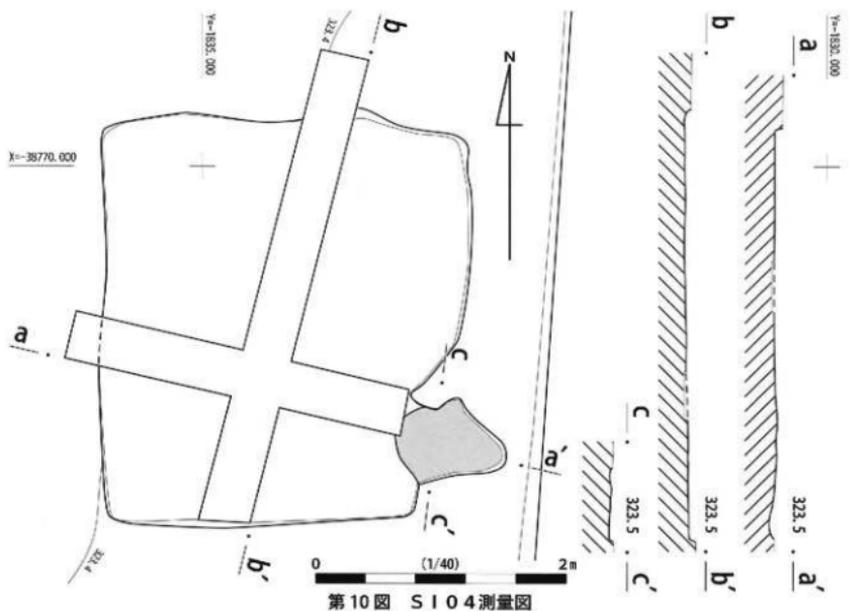
第6図 調査区4区・5区遺構配置図



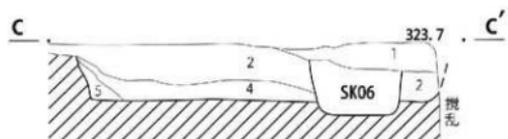
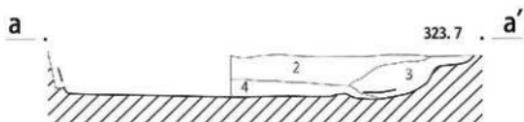
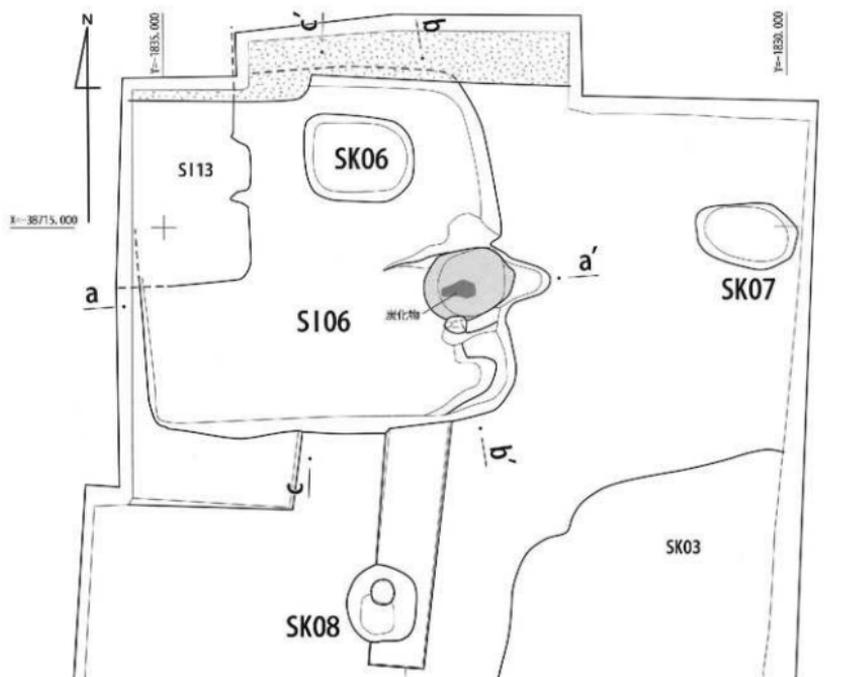
第8図 SI02・SK19測量図



第9図 SI03測量図



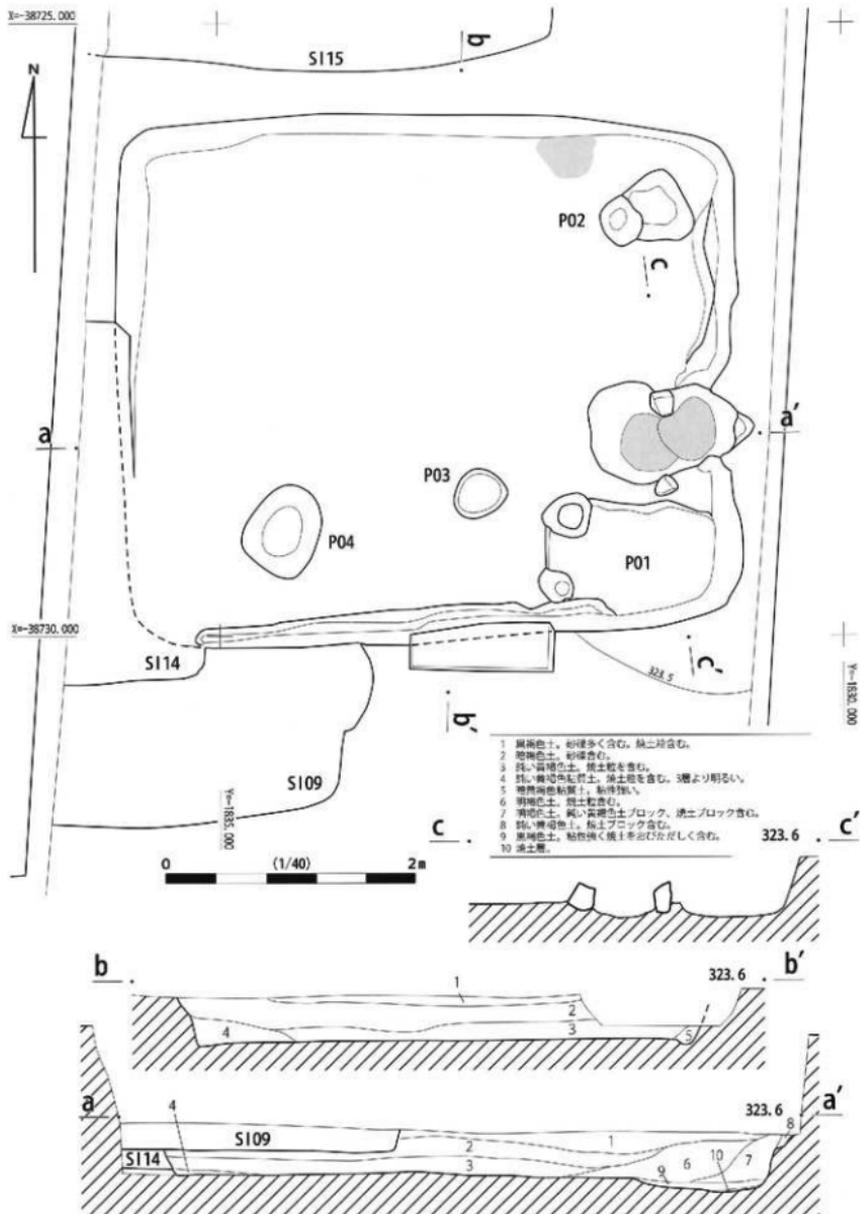
- 1 母岩地土、砂層あり。
- 2 礫層地土、黄褐色粘土ブロック含む。
- 3 純〜黄褐色土、砂層を多く含む。
- 4 黒褐色土、砂層を多く含む。



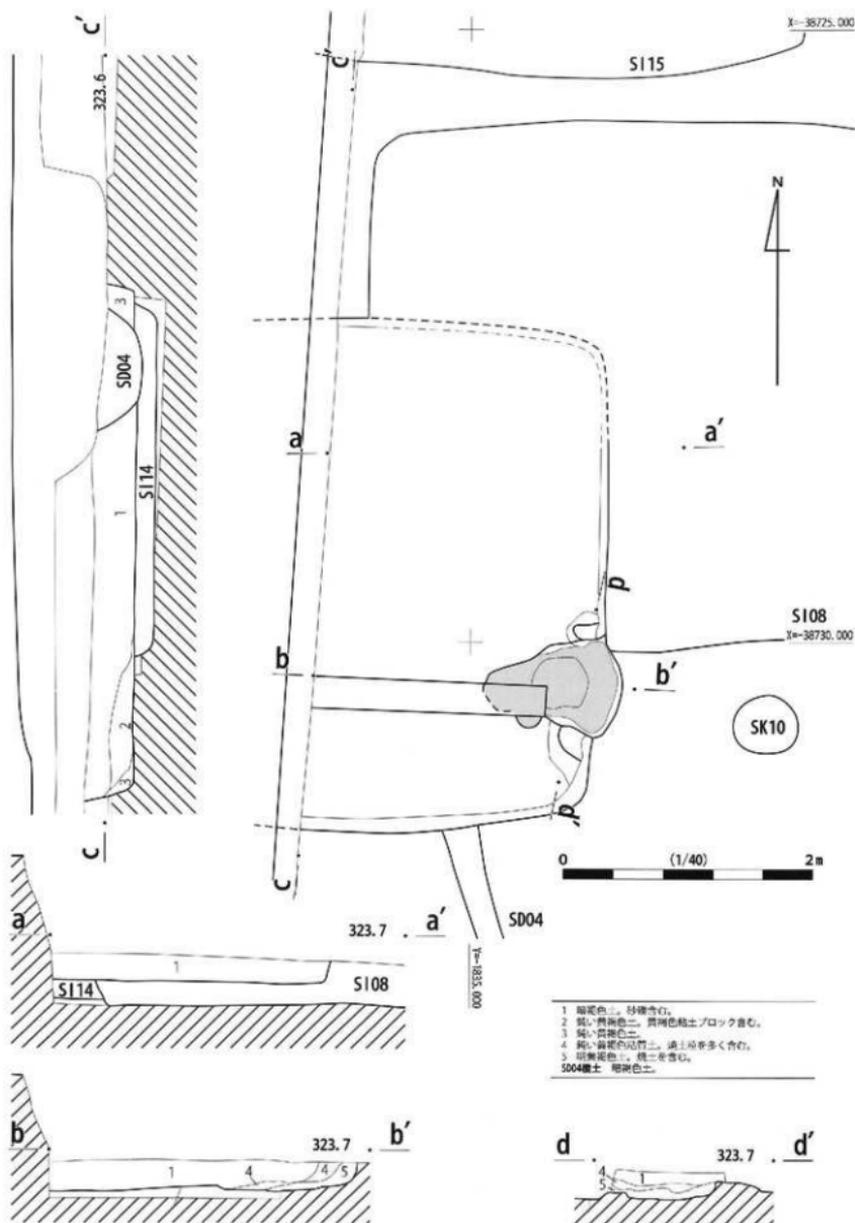
- 1 締結土。砂礫多く含む。
- 2 暗褐色土。
- 3 薄層土および礫の積層土。
- 4 赤い黄褐色土。
- 5 赤い黄褐色土。片持質。

0 (1/40) 2m

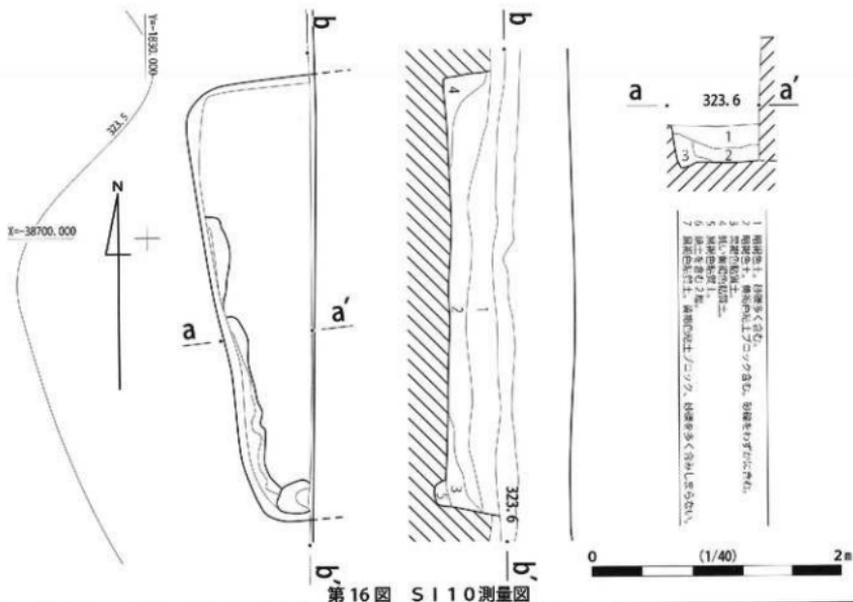
第12図 S106・SK06・SK07・SK08測量図



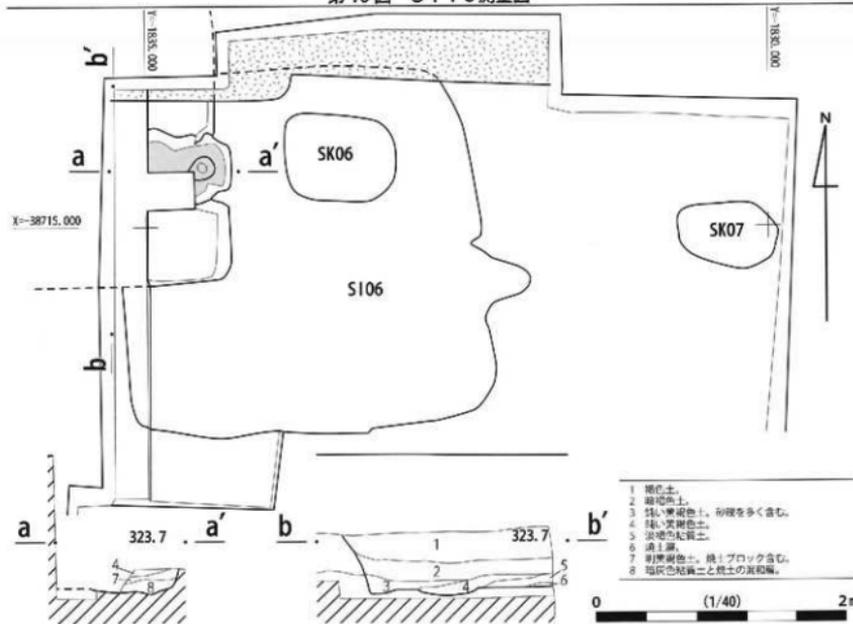
第14図 S108測量図



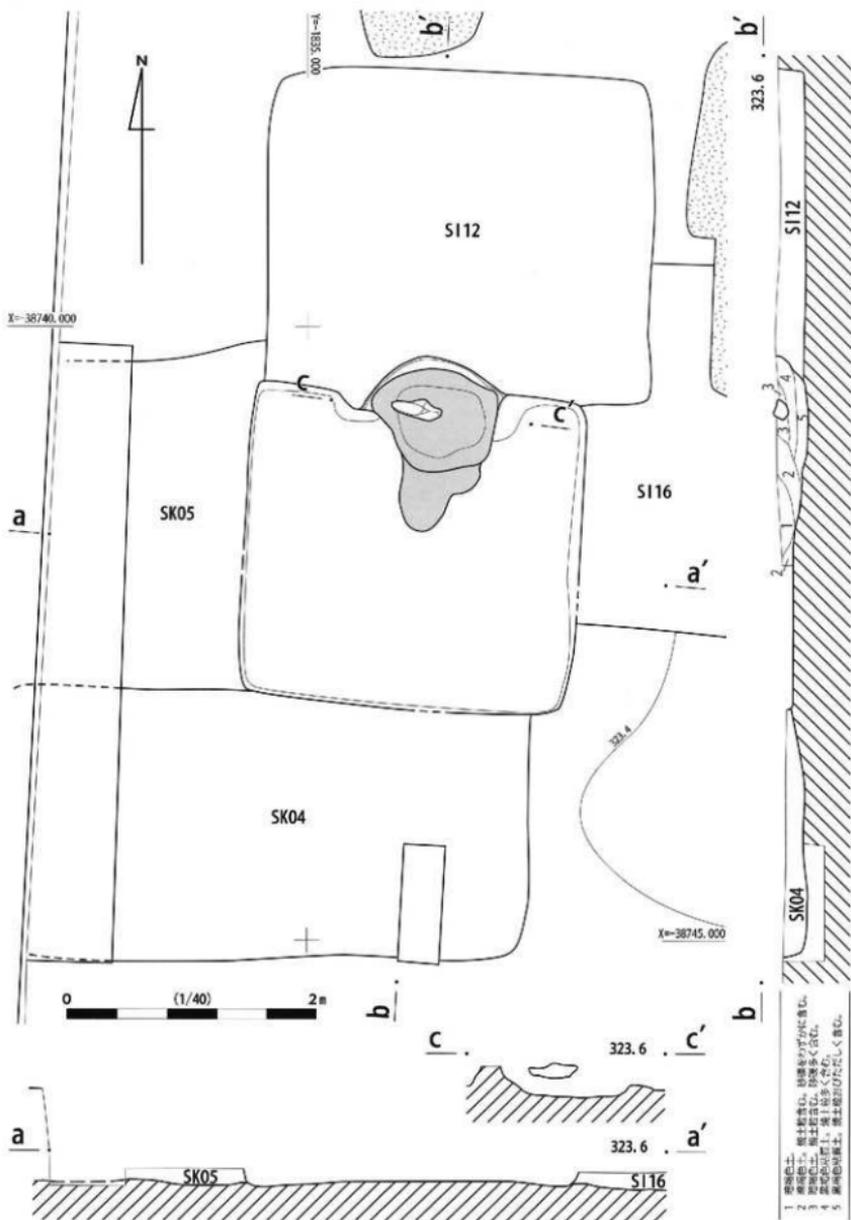
第15図 S109測量図



第16図 S110測量図

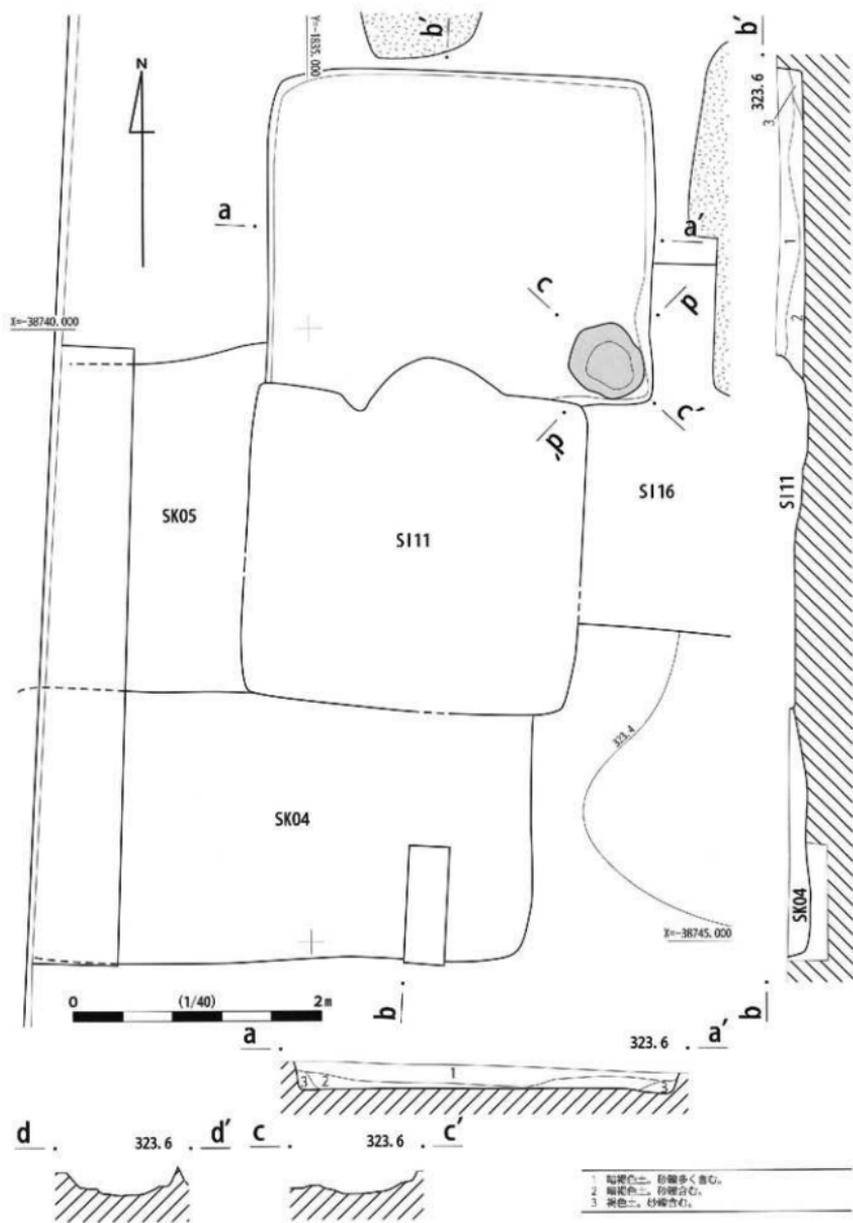


第17図 S113測量図

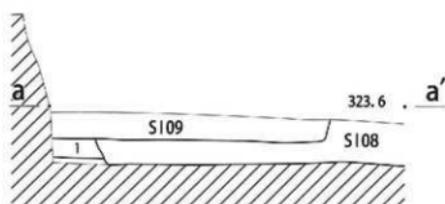
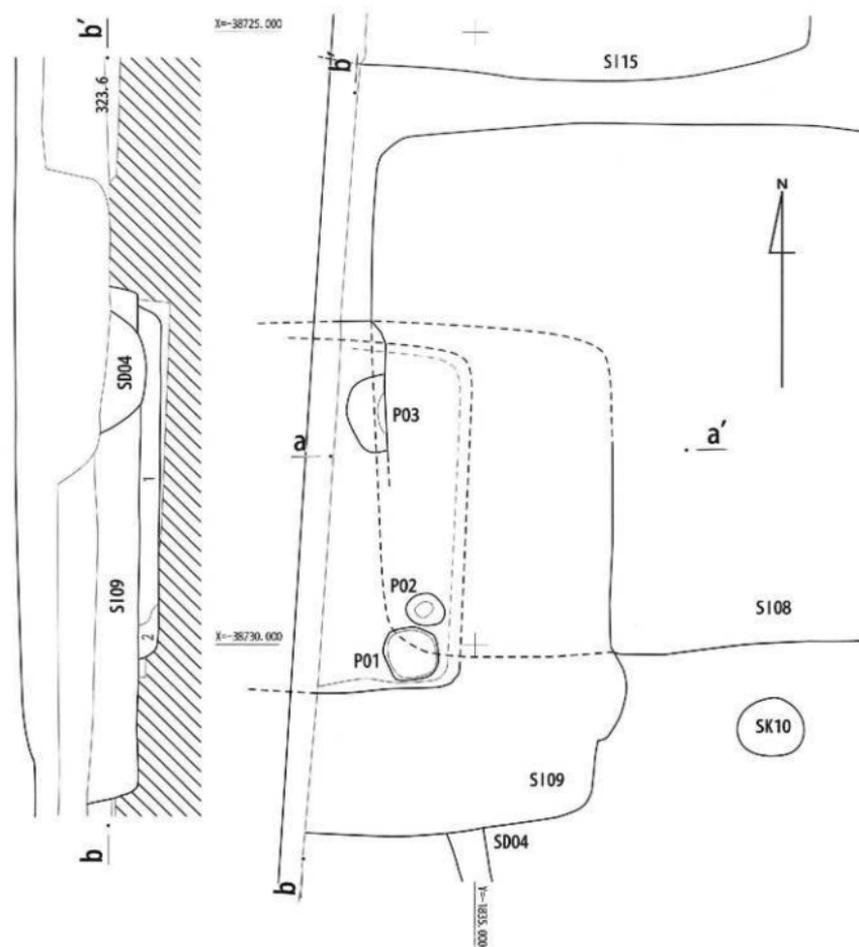


- 1 埋戻し土
- 2 埋戻し土
- 3 埋戻し土
- 4 埋戻し土
- 5 埋戻し土

第18図 S111測量図



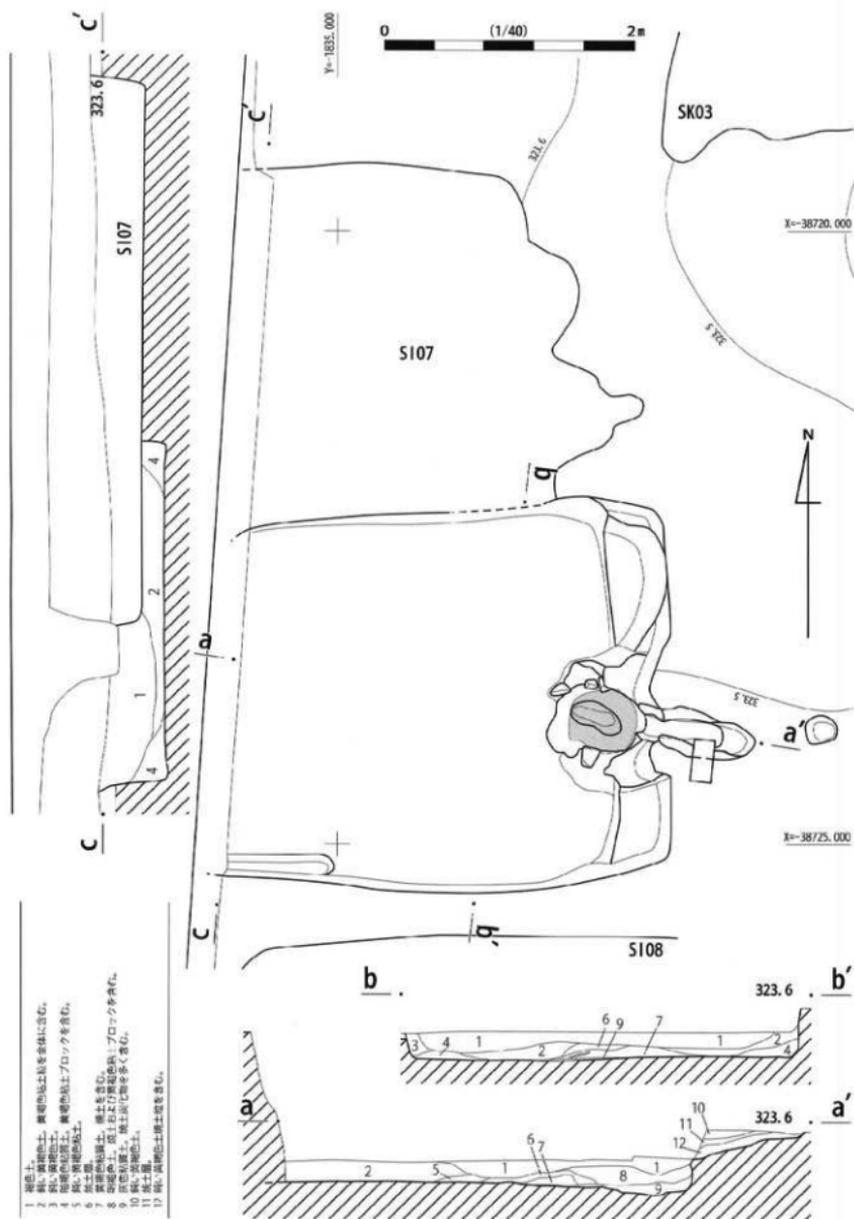
第19図 S112測量図



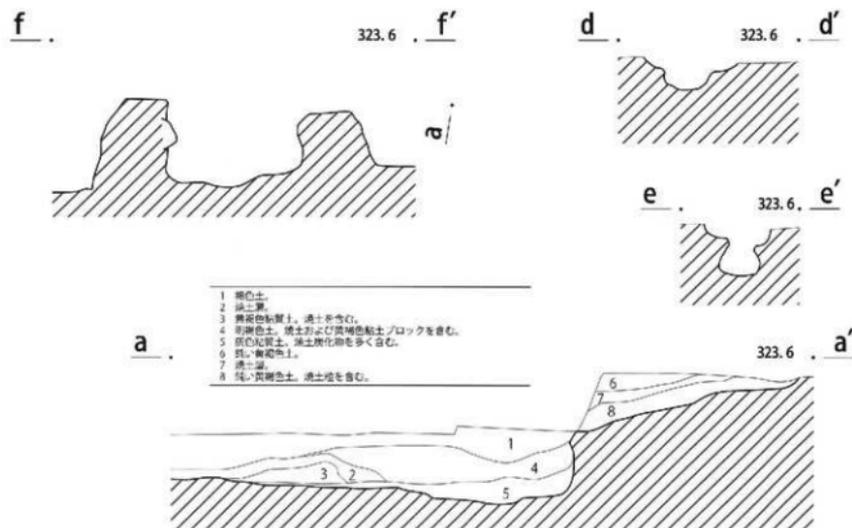
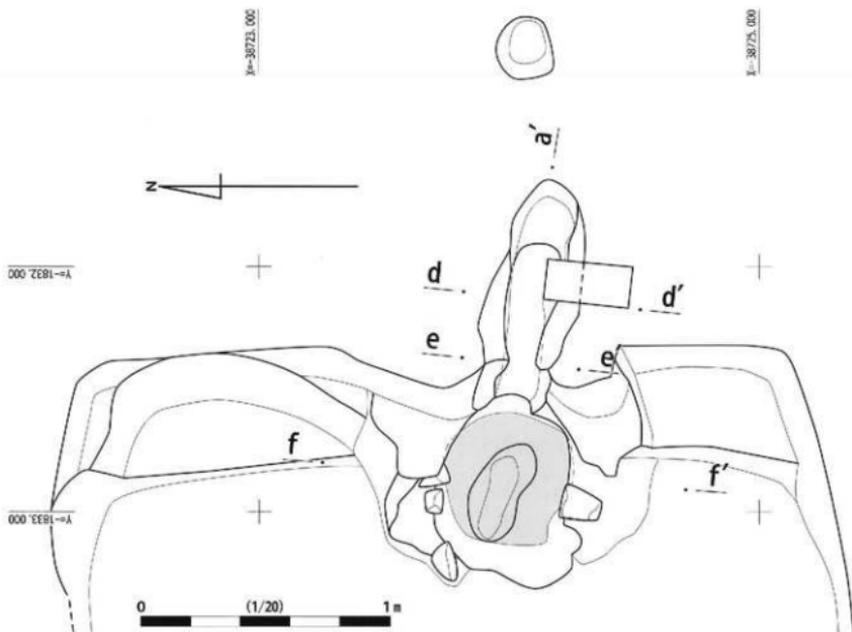
- 1 深い黄褐色土、黄褐色粘土ブロックを全体に含む。
- 2 深い黄褐色粘質土。



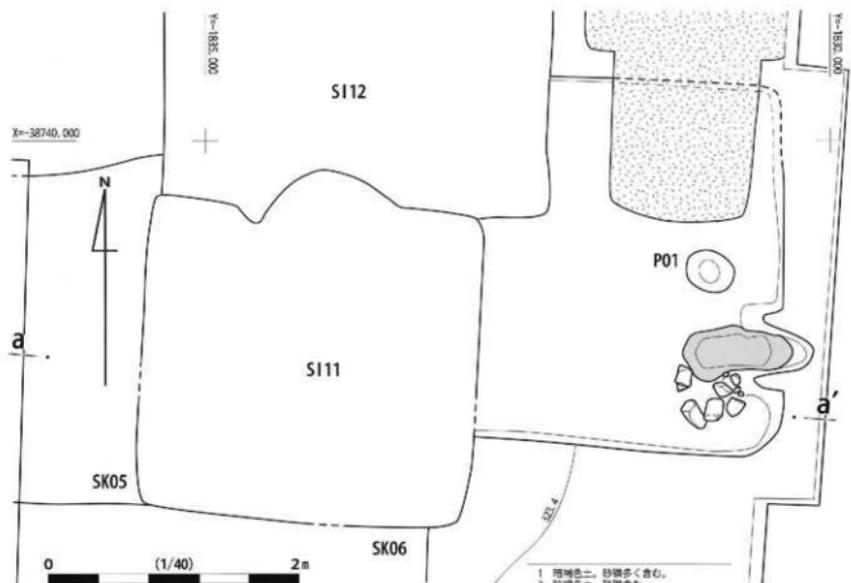
第20図 S114測量図



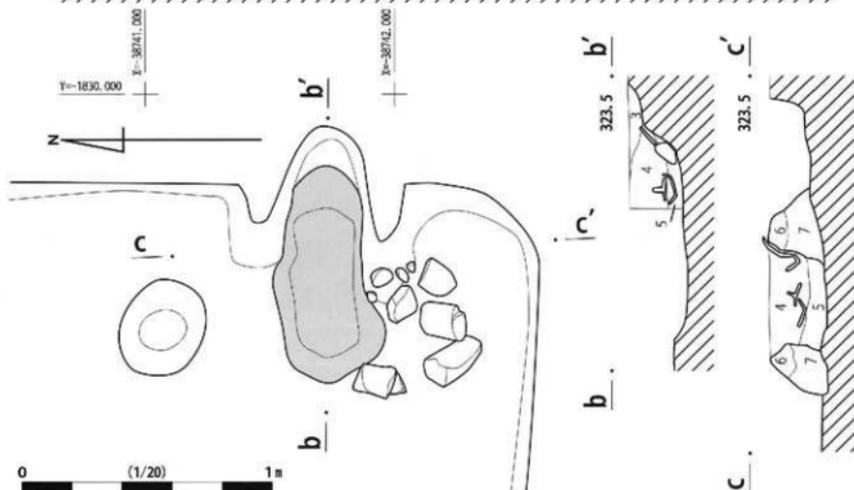
第21図 S115測量図(1)



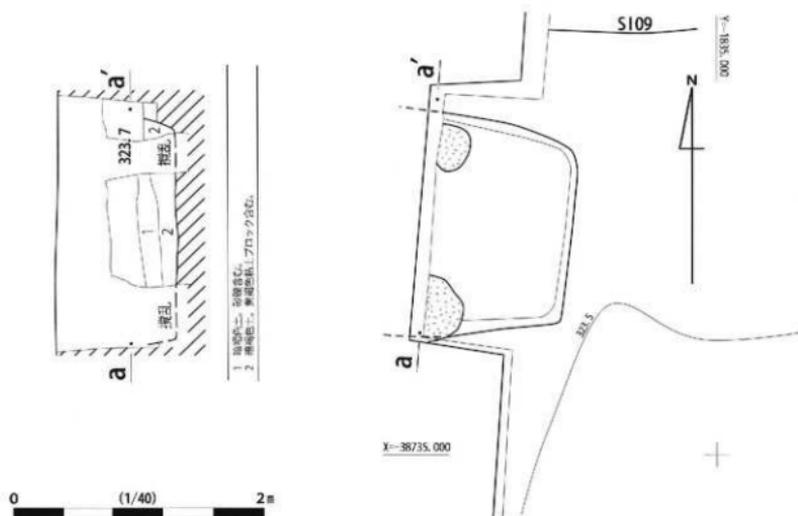
第22図 S115測量図(2)



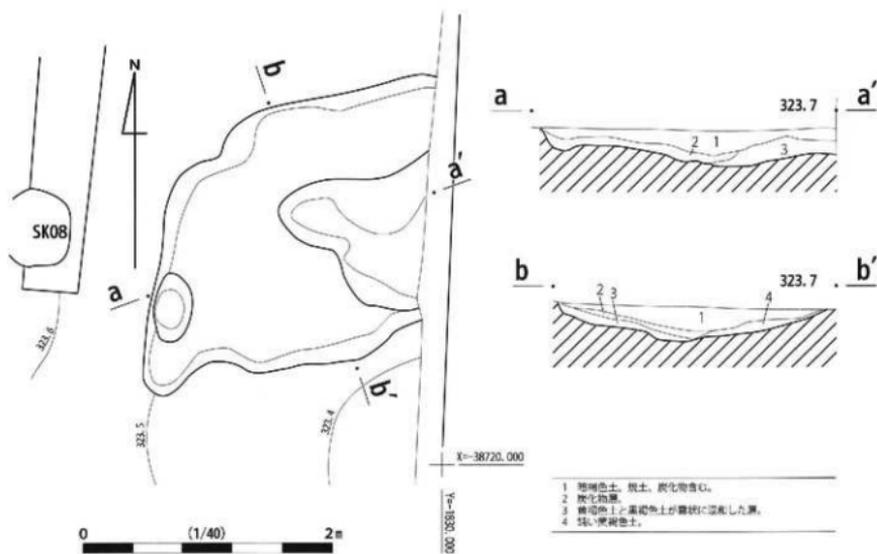
- 1 堆埧色土、砂很多く含む。
- 2 埧色土、砂混じり。
- 3 埧色土、粘土を多く含む。
- 4 埧色土、砂混じり。
- 5 赤褐色土、粘土が混じり、粘土を多く含む。
- 6 埧色土と砂の混じり層、L状。
- 7 埧色土と砂の混じり層、L状。



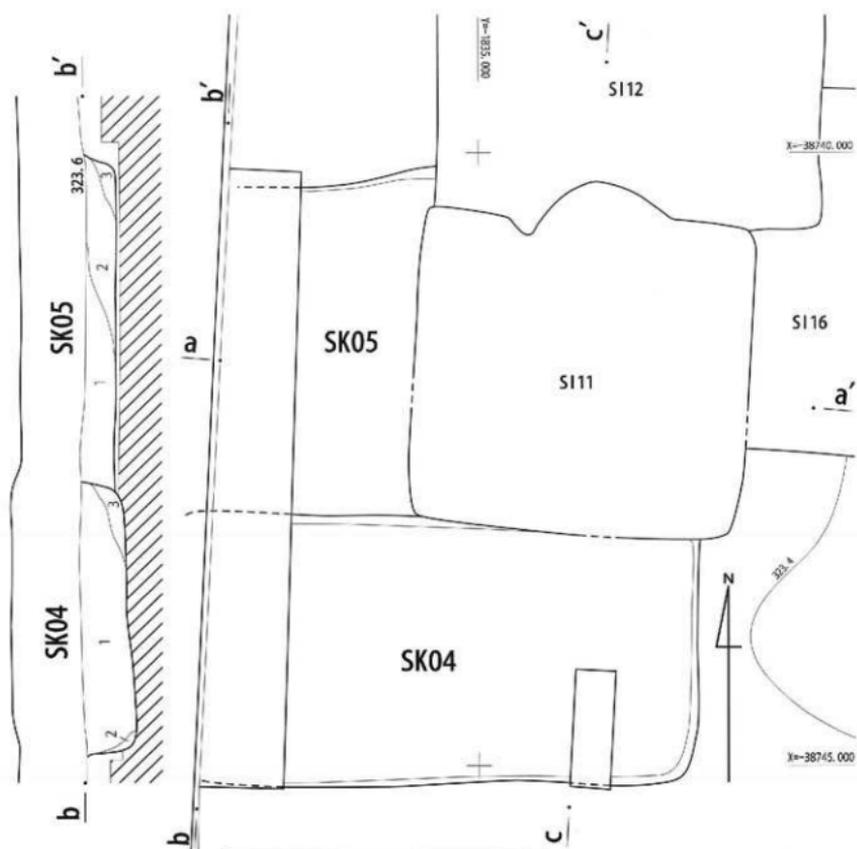
第23図 SI116測量図



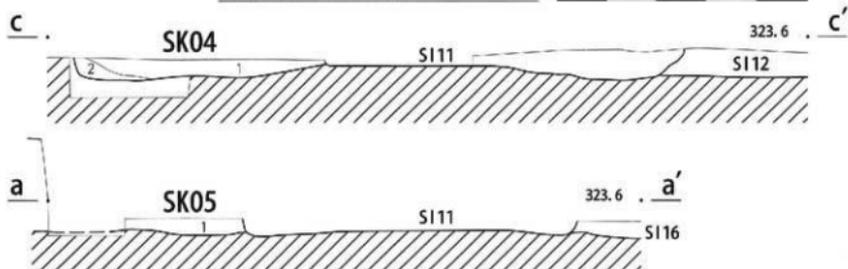
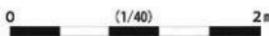
第24図 SK02測量図



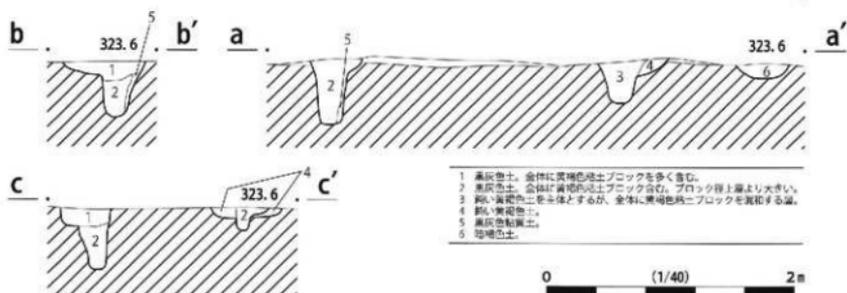
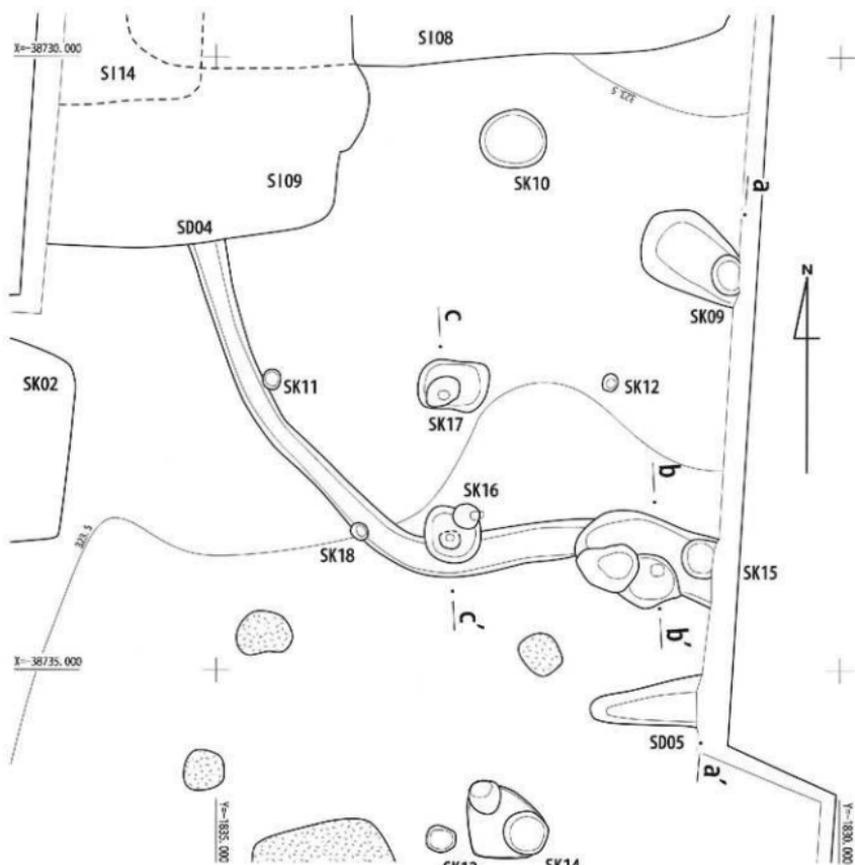
第25図 SK03測量図



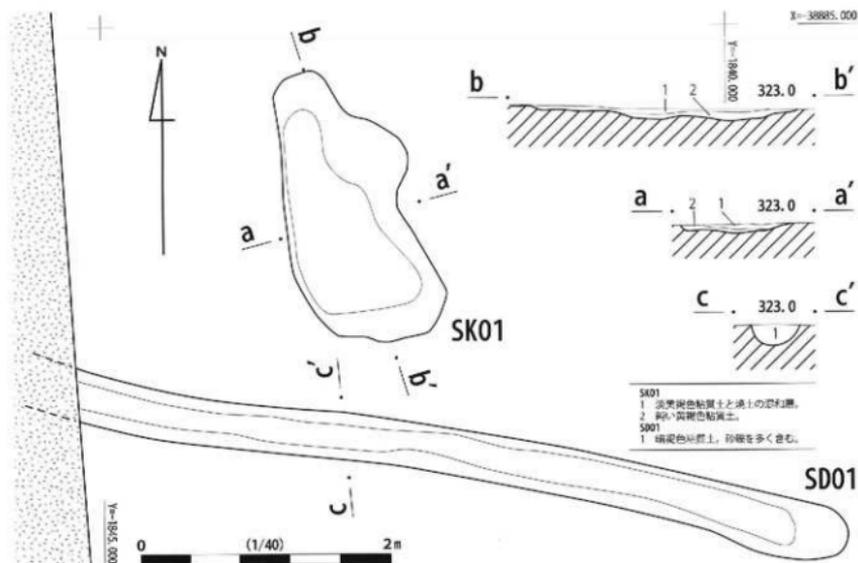
- SK04
 1 黄褐色土、砂礫を含む。
 2 灰、黄褐色土。
 3 黄褐色土、灰褐色土、砂礫を多く混入。
- SK05
 1 黄褐色土、砂礫を含む。
 2 黄褐色土、砂礫を多く含む、灰土粒を散在。
 3 黄褐色土、砂礫をほとんど含まない。



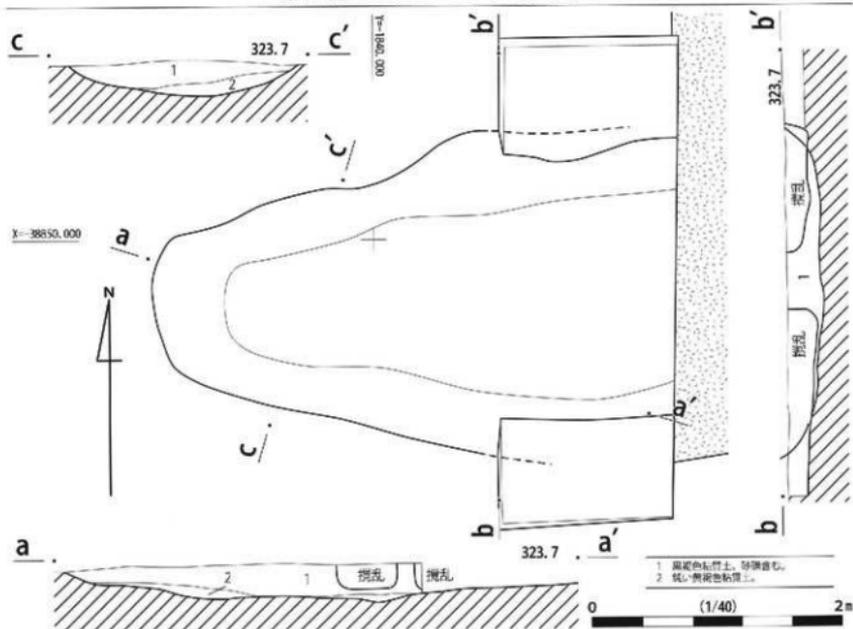
第26図 SK04・05測量図



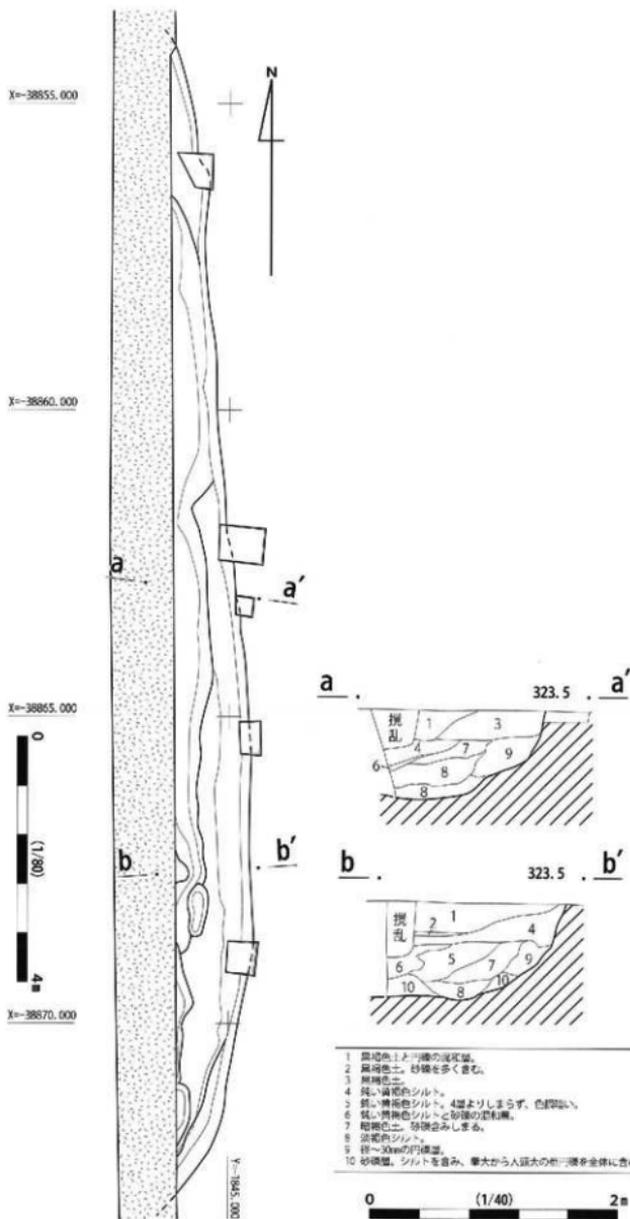
第27図 SK09~18・SD04・SD05測量図



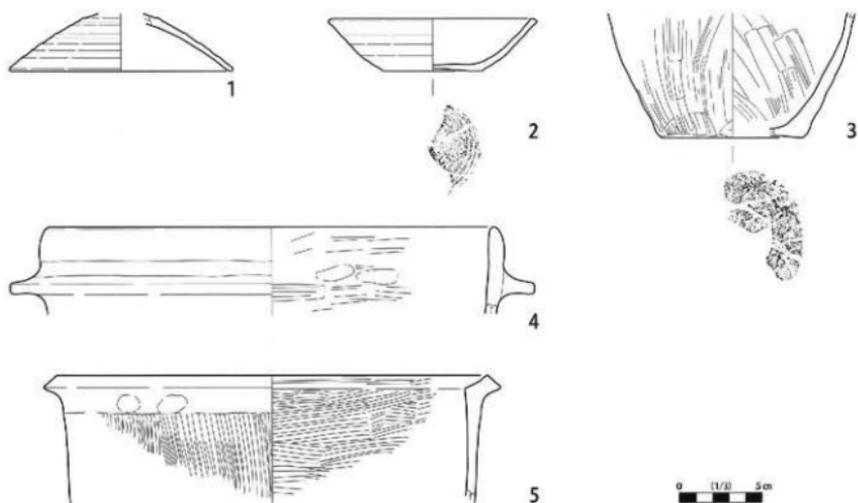
第28図 SK01・SD01測量図



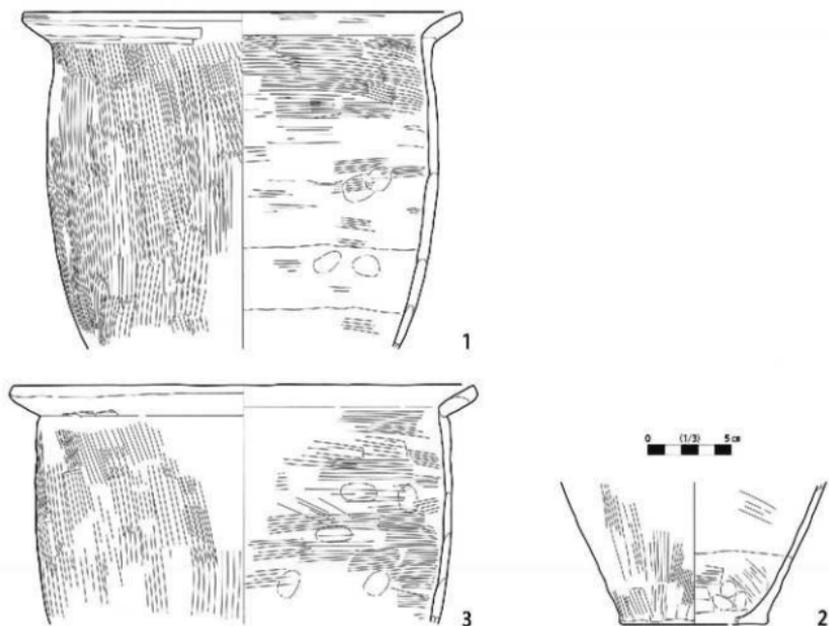
第29図 SD02測量図



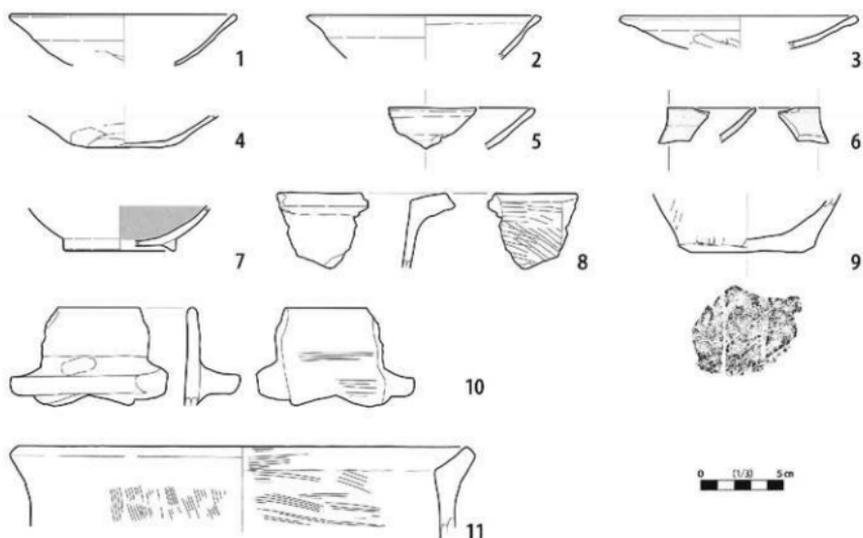
第30図 SD03測量図



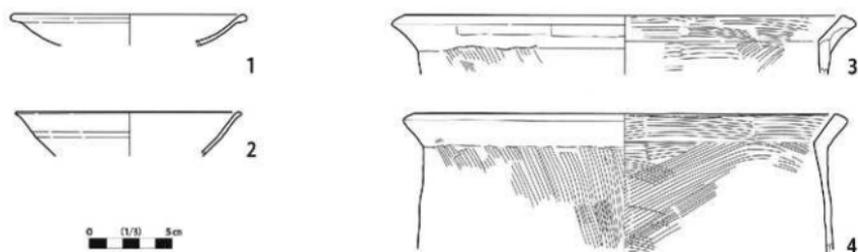
第31図 S101出土遺物



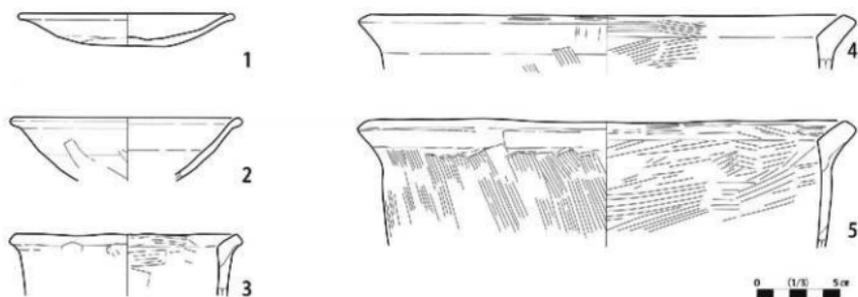
第32図 S102出土遺物



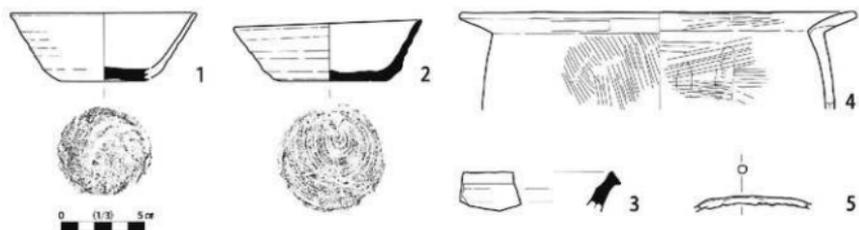
第33図 SI 03出土遺物



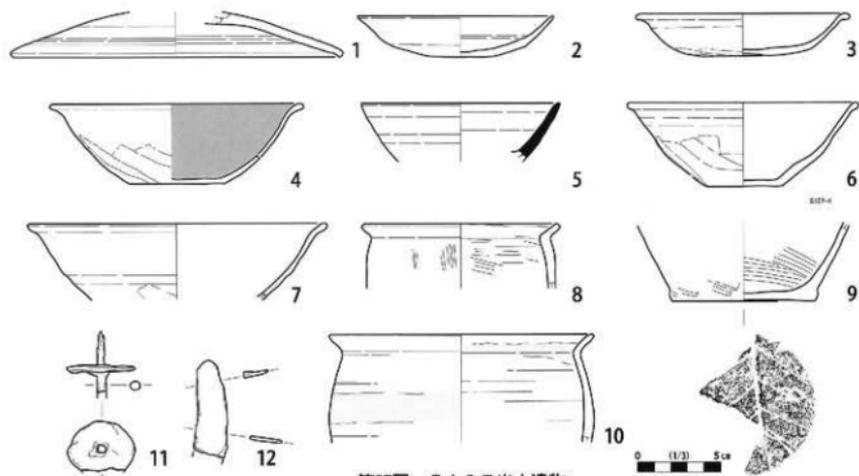
第34図 SI 04出土遺物



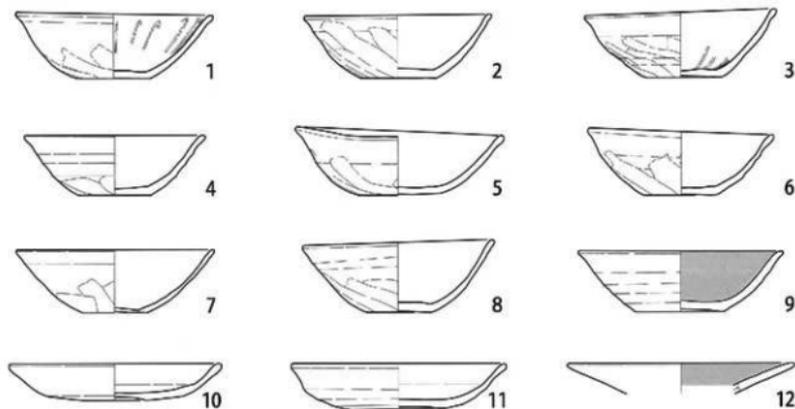
第35図 SI 05出土遺物



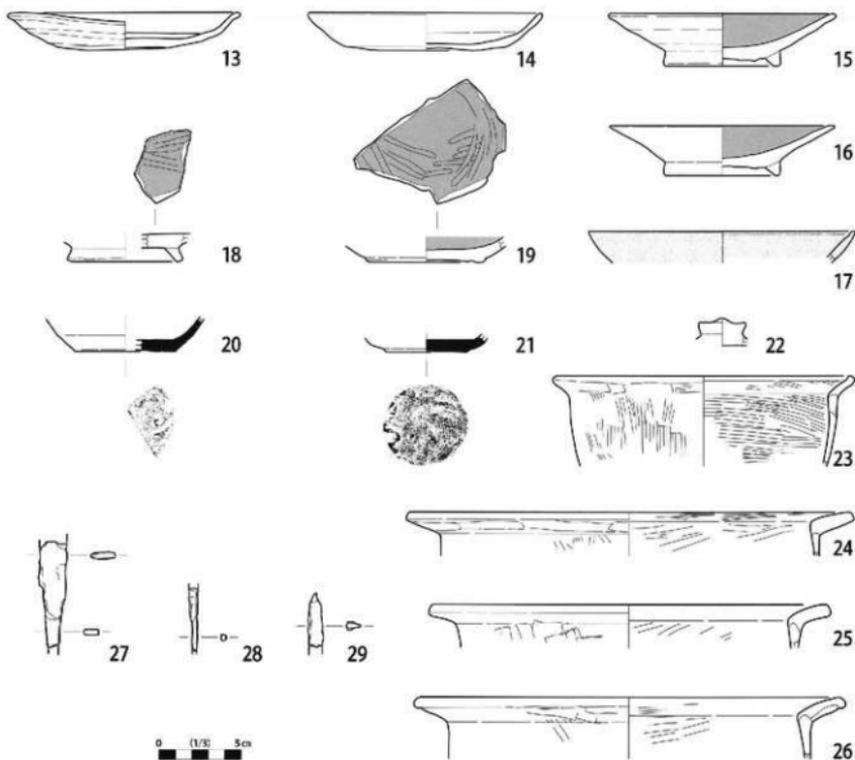
第36図 S106出土遺物



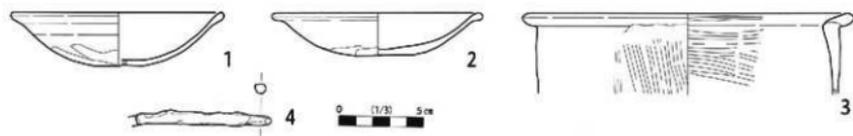
第37図 S107出土遺物



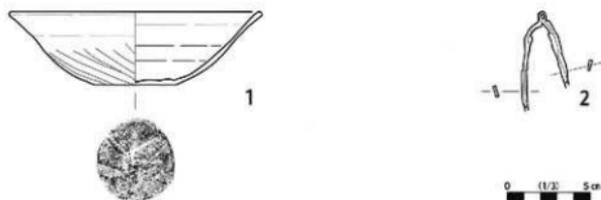
第38図 S108出土遺物 (1)



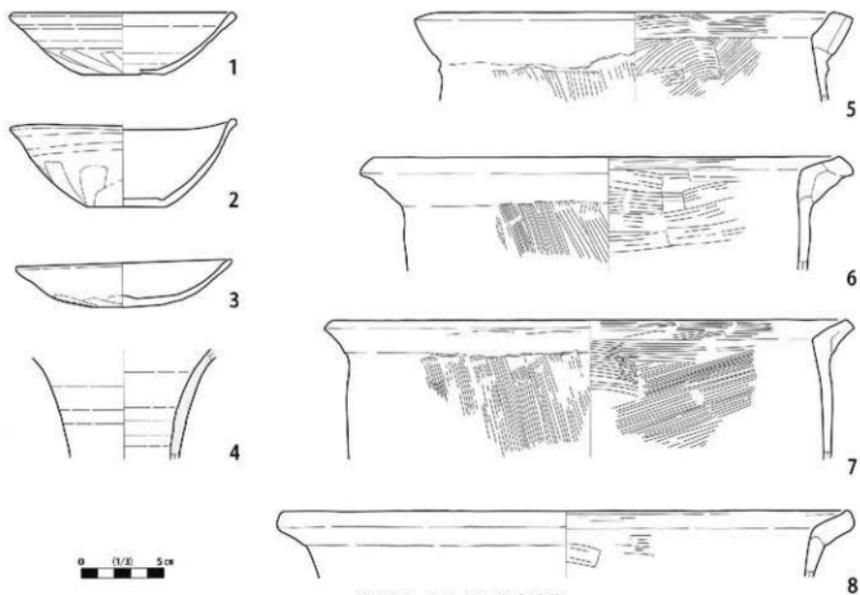
第39図 SI08出土遺物(2)



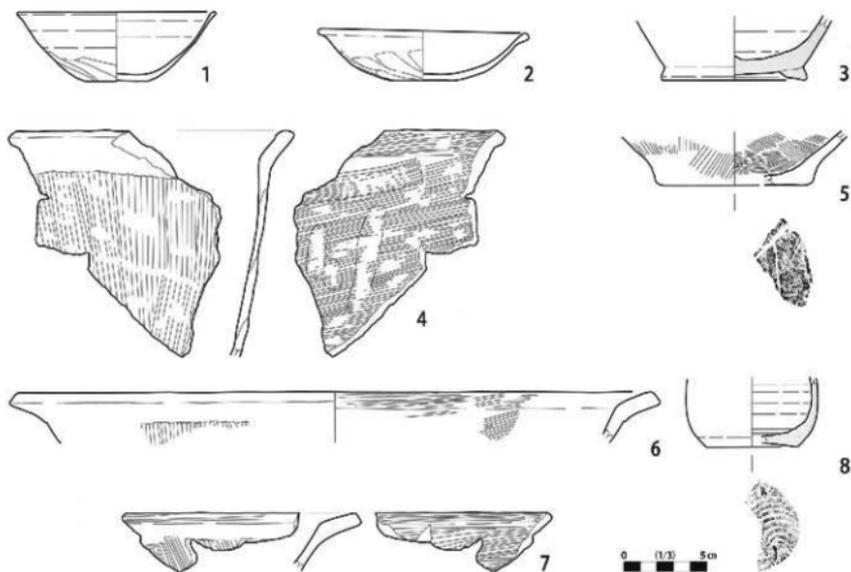
第40図 SI09出土遺物



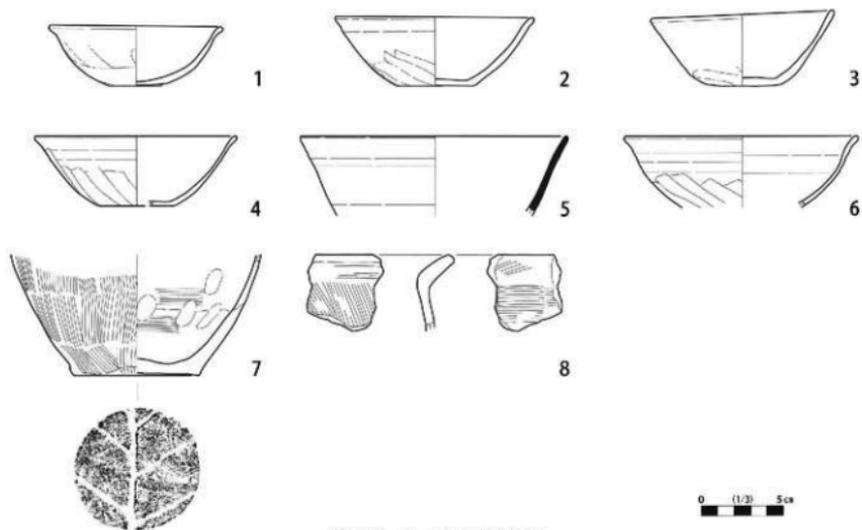
第41図 SI10出土遺物



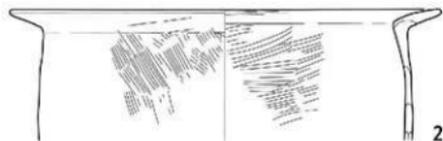
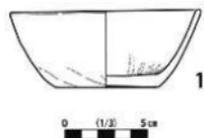
第42図 S111出土遺物



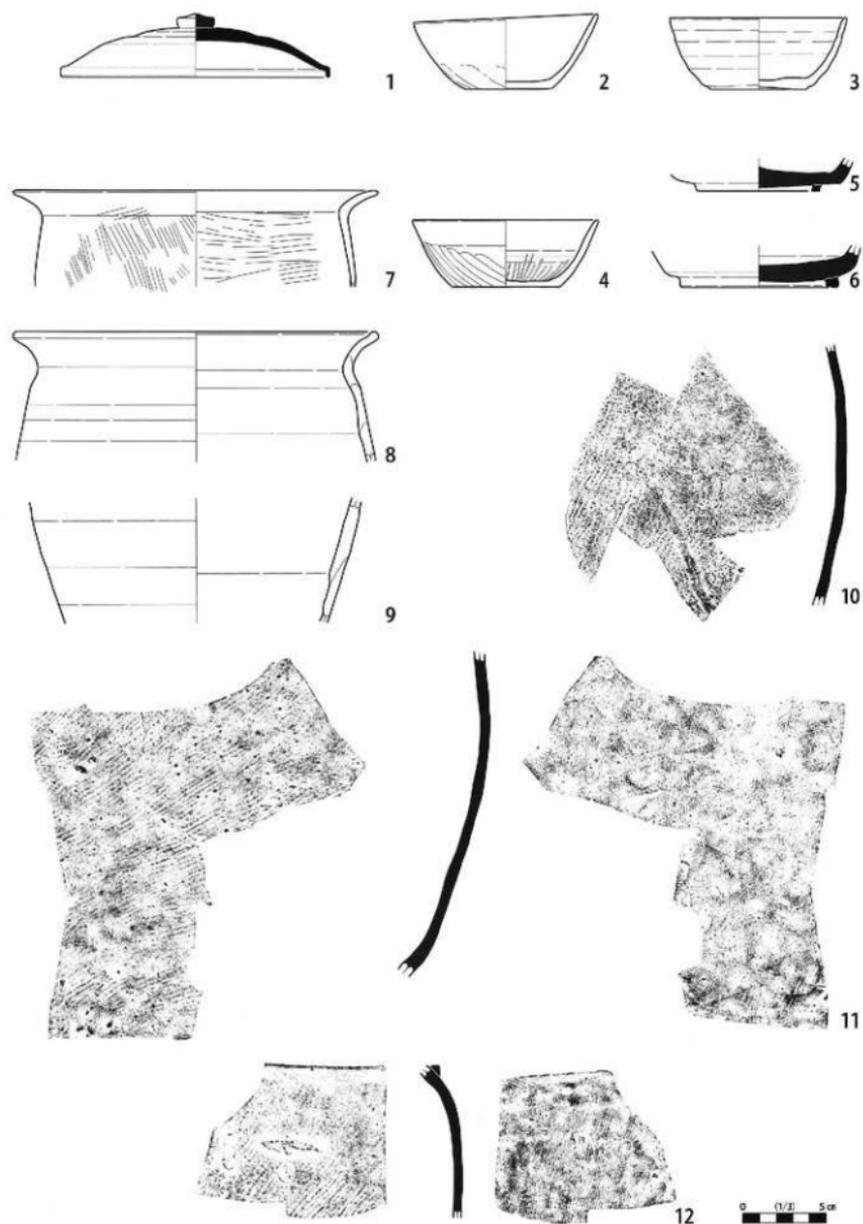
第43図 S112出土遺物



第44図 S I 1 3 出土遺物

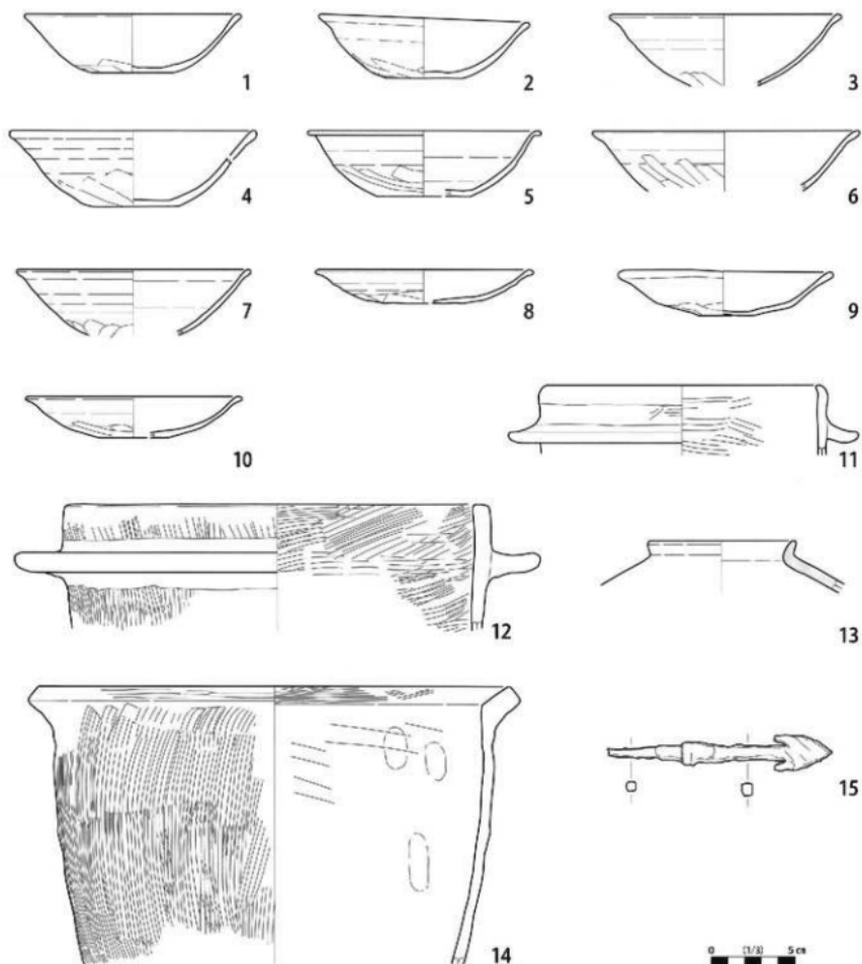


第45図 S I 1 4 出土遺物



第46図 S115出土遺物

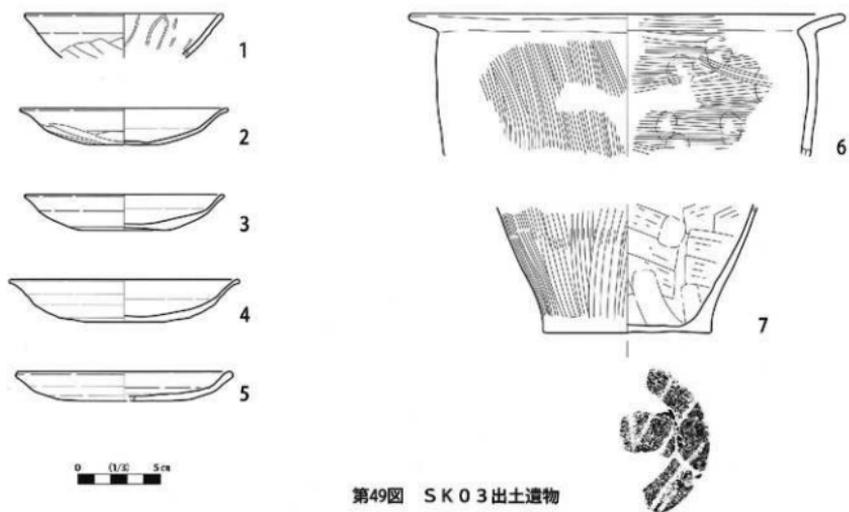
0 1/2 5cm



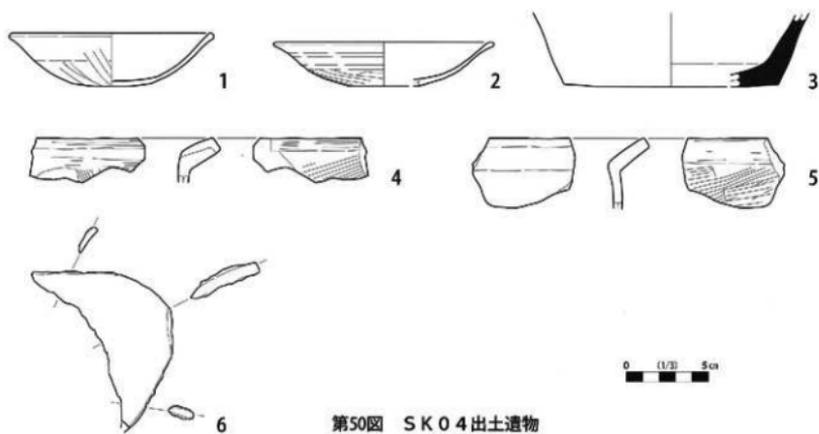
第●図 S116出土遺物



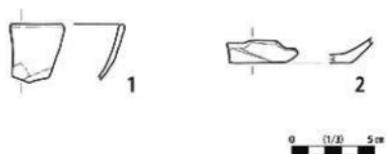
第●図 SK02出土遺物



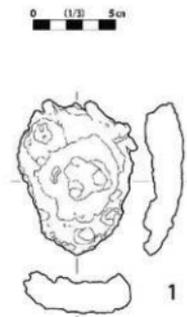
第49図 SK 03出土遺物



第50図 SK 04出土遺物



第51図 SK 05出土遺物



第52図 SK 06出土遺物

遺構名	番号	類別	器種	柱測値 (cm)			残存率	胎土	焼成	色調		形状 / その他
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (高さ)				外側	内側	
SI01	1	土師器	盃	(13.0)	-	(3.6)	体部の 1/4	緻密・ 赤色粘土	良好	橙色	褐色	
SI01	2	土師器	杯	(12.0)	(5.9)	3.25	2/3	緻密 ・赤色粘土	良好	褐色	褐色	底部回転系切り未調整
SI01	3	土師器	甕	-	(8.6)	(7.7)	底部の 1/4	緻密	良好	にぶい 赤褐色	褐色	底部木葉痕
SI01	4	土師器	羽釜	(26.4)	-	(5.4)	破片	緻密 ・砂粒多含	良好	暗灰 黄色	赤色	
SI01	5	土師器	壺	(26.0)	-	(7.9)	口縁部の 1/4	緻密	良好	褐色	褐色	
SI02	1	土師器	壺	(26.5)	-	(20.6)	□～体部の 1/3	緻密	良好	明赤 褐色	にぶい 褐色	
SI02	2	土師器	甕	-	(8.5)	(8.7)	底部1/4	緻密	良好	にぶい 赤褐色	赤褐色	底部木葉痕
SI02	3	土師器	甕	(27.8)	-	(14.6)	□～体部の 1/4	やや粗	良好	褐色	明赤 褐色	
SI03	1	土師器	杯	(13.2)	-	(3.1)	破片	緻密 ・赤色粘土	良好	褐色	褐色	
SI03	2	土師器	杯	(14.0)	-	(2.7)	破片	緻密 ・赤色粘土	良好	にぶい 褐色	にぶい 黄褐色	
SI03	3	土師器	皿	(14.0)	-	(2.0)	破片	緻密 ・赤色粘土	良好	褐色	褐色	
SI03	4	土師器	杯	-	(4.6)	(1.9)	破片	緻密 ・赤色粘土	良好	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
SI03	5	土師器	杯	-	-	(2.5)	破片	緻密 ・赤色粘土	良好	褐色	褐色	
SI03	6	灰釉陶器	碗	-	-	(2.1)	破片	緻密	良好	灰白色	灰オリ ープ色	
SI03	7	土師器	甕台付杯	-	(6.4)	(2.8)	破片	緻密 ・砂粒多含	良好	にぶい 褐色	黒色	内黒・付高台
SI03	8	土師器	壺	-	-	(4.6)	破片	緻密	良好	赤褐色	赤褐色	
SI03	9	土師器	壺	-	(6.6)	(3.6)	破片	緻密 ・砂粒多含	やや軟	赤褐色	褐色	杯と阿賀の胎土 ・底部木葉痕
SI03	10	土師器	羽釜	-	-	(6.0)	破片	緻密 ・砂粒多含	良好	にぶい 黄褐色	にぶい 褐色	
SI03	11	土師器	甕	(27.2)	-	(5.7)	破片	緻密 ・砂粒多含	良好	にぶい 褐色	黒褐色	
SI04	1	土師器	皿	(13.8)	-	(1.9)	□縁部の 1/3	緻密 ・赤色粘土	良好	明赤 褐色	にぶい 赤褐色	
SI04	2	土師器	杯	(13.4)	-	(2.7)	破片	緻密 ・赤色粘土	良好	赤褐色	褐色	
SI04	3	土師器	碗	(26.4)	-	(3.6)	破片	緻密	良好	赤褐色	明赤 褐色	
SI04	4	土師器	甕	(25.4)	-	(8.6)	□～体部の 1/4	緻密	良好	赤褐色	褐色	

第2表 遺物観察表(1)

遺構名	番号	種別	器種	計測値 (cm)			残存率	胎土	焼成	色調		形状 / その他
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (高さ)				外側	内側	
SI05	1	土師器	杯	17.6	3.85	2.0	3/4	緻密・赤色粒子	良好	褐色	褐色	
SI05	2	土師器	杯	(13.4)	-	(3.9)	□~体部の1/4	緻密・赤色粒子	良好	褐色	にぶい褐色	口縁部にカーボン吸着
SI05	3	土師器	甕	(13.2)	-	(3.8)	破片	緻密	良好	治赤灰色	暗赤灰色	
SI05	4	土師器	甕	(28.4)	-	(3.4)	破片	緻密	良好	明赤褐色	褐色	
SI05	5	土師器	甕	(28.6)	-	(7.9)	□縁部1/3	緻密	良好	にぶい褐色	明赤褐色	
SI06	1	須恵器	杯	(10.5)	5.5	4.1	□~体部1/4・底面欠存	緻密・白色粒子	良好	灰色	灰色	底部回転糸切り未調整
SI06	2	須恵器	杯	10.95	7.0	3.75	□~体部3/4・底面欠存	緻密・白色粒子	良好	黄灰色	灰色	底部回転糸切り未調整
SI06	3	須恵器	甕	-	-	(2.4)	破片	やや粗	良好	黄灰色	黄灰色	口内~内面自然釉
SI06	4	土師器	甕	(23.5)	-	(6.0)	□縁部の1/4	緻密	良好	暗赤褐色	にぶい赤褐色	
SI06	5	鉄製品	不明	(5.7)	0.5	0.5	不明					
SI07	1	土師器	甕	(19.6)	-	(2.8)	□~体部の1/3	緻密	良好	褐色	にぶい褐色	
SI07	2	土師器	口	11.8	3.6	2.5	3/4	粗・赤色粒子多量・器-1層位の厚さを多く含む	軟質	褐色	褐色	
SI07	3	土師器	皿	12.3	3.15	2.6	□~体部3/4・底面欠存	緻密・赤色粒子	良好	褐色	褐色	底部回転糸切り後外周をヘラケズリ
SI07	4	土師器	杯	(14.4)	5.15	4.9	□~体部1/3・底面欠存	緻密・赤色粒子	良好	黄褐色	赤色	内黒・底面全面ヘラケズリ
SI07	5	須恵器	杯	(11.8)	-	(3.6)	□~体部の1/3	緻密・赤色粒子・黒色粒子	良好	灰色	灰色	
SI07	6	土師器	杯	(13.8)	4.6	5.15	□~体部1/2・底面欠存	やや粗・赤色粒子	良好	黄褐色	浅黄色	底面全面ヘラケズリ
SI07	7	土師器	杯	(17.7)	-	(4.7)	□~体部の1/3	緻密・赤色粒子	良好	褐色	褐色	
SI07	8	土師器	甕	(11.6)	-	(14.0)	□~体部の1/4	緻密	良好	明赤褐色	灰褐色	
SI07	9	土師器	甕	-	(8.6)	(4.8)	底部2/3	緻密	良好	にぶい赤褐色	黒褐色	底部木葉痕
SI07	10	土師器	甕	(15.8)	-	(6.6)	破片	緻密	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	クワ形状・口縁部内面及び外周上部に溝状に炭化物付着
SI07	11	鉄製品	紡錘車	(3.8)	4.1	3.0	破片					
SI07	12	鉄製品	不明	(6.0)	2.0	0.3	破片					
SI08	1	土師器	杯	11.8	4.3	4.1	4/5	緻密・赤色粒子	良好	褐色	褐色	底面全面ヘラケズリ

第3表 遺物観察表(2)

遺物名	番号	種別	器種	寸法値 (cm)			残存率	胎土	焼成	色調		形状・その他
				口径 (長さ)	底径 (幅)	高さ (厚さ)				外側	内側	
S108	2	土師器	杯	11.2	4.5	3.85	口縁部の 1/4欠	緻密・ 赤色粒子	良好	明赤 褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
S108	3	土師器	杯	11.35	4.5	4.15	口縁部3/ 4・底部欠存	緻密・ 赤色粒子	良好	にぶい 黄褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
S108	4	土師器	杯	(10./)	4.4	3.7	口縁部1/ 3・底部欠存	緻密・ 赤色粒子	軟質	褐色	浅黄 褐色	底部全面ヘラケズリ
S108	5	土師器	杯	12.3	5.0	4.15	2/3	やや粗 赤色粒子	良好	褐色	褐色	底部回転糸切り後外周 をヘラケズリ
S108	6	土師器	杯	10.9	4.3	4.1	ほぼ完存	緻密・ 赤色粒子	軟質	褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
S108	7	土師器	杯	(11.8)	(3.9)	3.85	1/3	緻密・ 赤色粒子	良好	黄褐色	にぶい 黄褐色	底部全面ヘラケズリ
S108	8	土師器	杯	11.4	4.0	4.4	口縁部2/ 3・底部欠存	やや粗・ 赤色粒子・砂 粒多量	良好	黄褐色	黄褐色	底部全面ヘラケズリ
S108	9	土師器	杯	12.25	5.3	3.75	完存	粗・砂粒・赤 色粒子多量	良好	淡黄色	オリブ 黒色	内黒・底部積層厚減に より不明
S108	10	土師器	皿	(12.6)	(3.8)	2.3	1/3	緻密・赤色 粒子	良好	褐色	黄褐色	底部全面ヘラケズリ
S108	11	土師器	杯	(12.7)	5.6	2.8	口縁部1/ 3・底部欠存	緻密・赤色 粒子	良好	浅黄 褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
S108	12	土師器	皿	(13.5)	-	(1.9)	口縁部1/ 3	粗・砂粒・赤 色粒子多量	良好	浅黄 褐色	灰色	内黒
S108	13	土師器	皿	13.65	4.9	2.25	3/4	緻密・赤色 粒子	良好	黄褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
S108	14	土師器	皿	13.2	5.6	2.3	2/3	緻密・赤色 粒子	良好	浅黄 褐色	褐色	底部回転ヘラケズリ・ 口縁部にカーボン附着
S108	15	土師器	高台付皿	13.25	6.85	3.2	ほぼ完存	粗・砂粒・赤 色粒子多量	良好	淡黄色	オリブ 黒色	内黒・付高台
S108	16	土師器	高台付皿	(13.2)	6.7	3.1	口縁部の 1/3欠	粗・砂粒・赤 色粒子多量	良好	淡灰色	暗灰色	内黒・付高台
S108	17	灰釉陶器	碗	(15.9)	-	(2.9)	破片	緻密	良好	オリブ 灰色	オリブ 灰色	
S108	18	土師器	高台付杯	-	(6.2)	(1.7)	底部1/4	緻密・ 赤色粒子	良好	灰褐色	オリブ 黒色	内黒・付高台・見込み に不整方向のミガキ
S108	19	土師器	高台付杯	-	(7.0)	(1.6)	底部1/2	緻密・ 赤色粒子	良好	褐色	黄灰色	内黒・副出し高台・見込み に不整方向のミガキ
S108	20	須恵器	杯	-	(6.0)	(2.2)	底部1/3	緻密・白色粒 子・黒色粒	やや軟	灰色	灰色	底部回転糸切り未調整
S108	21	須恵器	杯	-	4.8	(0.9)	底部完存	緻密・白色粒 子・黒色粒	良好	灰色	灰色	底部回転糸切り未調整
S108	22	土師器	蓋	2.6	-	(1.7)	つまみ部完 存	緻密・ 赤色粒子	やや軟	明赤 褐色	にぶい 褐色	計測はつまみ部径
S108	23	土師器	壺	(17.6)	-	(5.5)	破片	緻密	良好	褐色	褐色	
S108	24	土師器	壺	(26.4)	-	(2.7)	破片	緻密	良好	赤褐色	明赤 褐色	

第4表 遺物観察表(3)

遺構名	番号	種別	器種	計測値 (cm)			残存率	胎土	焼成	色相		形状・その他
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (高さ)				外側	内側	
S108	25	土師器	甕	(23.5)	-	(2.7)	破片	緻密	良好	褐色	褐色	
S108	26	土師器	甕	(25.2)	-	(3.8)	破片	緻密	良好	褐色	にぶい 褐色	
S108	27	鉄製品	刀子か	(6.5)	1.6	0.6	破片					
S108	28	鉄製品	不明	(3.7)	0.5	0.7	破片					
S108	29	鉄製品	刀子か	(3.2)	0.9	0.6	破片					
S109	1	土師器	杯	(12.4)	(3.3)	3.3	1/2	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
S109	2	土師器	皿	12.1	3.5	2.6	□縁部の 1/4欠	緻密 ・赤色粒子	良好	にぶい 黄褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
S109	3	土師器	甕	(19.2)	-	(4.9)	破片	緻密	良好	明赤 褐色	明赤 褐色	
S109	4	鉄製品	不明	(8.2)	0.8	0.8	破片					
S110	1	土師器	杯	(15.1)	5	4.5	□~縁部1/ 3・底部欠存	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
S110	2	鉄製品	毛抜き状	(5.9)	3.1	0.7	不明					
S111	1	土師器	杯	(13.0)	(5.2)	3.8	1/3	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
S111	2	土師器	杯	13.4	4.7	5.35	ほぼ完存	やや粗・ 赤色粒子・砂 粒多量	良好	黄褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
S111	3	土師器	皿	12.8	4.4	2.9	□縁部の 1/3欠	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
S111	4	灰釉陶器	壺	-	-	(6.8)	破片	緻密 ・黒色粒子	良好	灰白色	灰白色	
S111	5	土師器	甕	(24.0)	-	(5.5)	破片	緻密	良好	明赤 褐色	にぶい 赤褐色	
S111	6	土師器	甕	(28.0)	-	(7.0)	破片	粗	良好	暗褐色	褐色	
S111	7	土師器	甕	(31.0)	-	(8.5)	破片	緻密	良好	にぶい 褐色	褐色	
S111	8	土師器	甕	(34.0)	-	(4.1)	破片	緻密	良好	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
S112	1	土師器	杯	11.8	4	4.2	□~縁部1/ 4・底部欠存	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
S112	2	土師器	皿	12.4	3.6	3.15	完存	緻密 ・赤色粒子	良好	褐灰色	にぶい 褐色	底部全面ヘラケズリ
S112	3	灰釉陶器	壺	-	8.5	(3.9)	底部完存	緻密	やや軟	灰白色	灰白色	付高台
S112	4	土師器	甕	-	-	(14.0)	破片	緻密	良好	にぶい 赤褐色	明赤 褐色	

第5表 遺物観察表(4)

遺物名	番号	種別	器種	計測値 (cm)			残存率	胎土	焼成	色調		整形 / その他
				口径 (長さ)	底径 (幅)	高さ (厚さ)				外側	内側	
SI12	5	土師器	壺	-	(8.6)	(3.3)	破片	緻密	良好	明赤褐色	にぶい褐色	底部木葉痕
SI12	6	土師器	鉢	(38.0)	-	(3.1)	破片	緻密	良好	明赤褐色	明赤褐色	
SI12	7	土師器	鉢	-	-	(3.6)	破片	緻密	良好	明褐色	褐色	
SI12	8	灰釉陶器	壺	-	(5.5)	(4.2)	底部 1/2	緻密	良好	灰白色	灰白色	底部回転糸切り未調整
SI13	1	土師器	杯	10.25	3.5	3.75	□～体部 1/2・底部完存	緻密・赤色粒子	良好	褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
SI13	2	土師器	杯	11.75	4.65	4.25	ほぼ完存	緻密・赤色粒子	良好	褐色	オリブ黒色	底部全面ヘラケズリ
SI13	3	土師器	杯	10.7	4.15	4.6	□～体部 1/4・底部完存	緻密・赤色粒子	軟質	褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
SI13	4	土師器	杯	(11.8)	(4.5)	4.25	1/3	緻密・赤色粒子	良好	褐色	明赤褐色	底部全面ヘラケズリ
SI13	5	須恵器	杯	(15.6)	-	(4.8)	破片	緻密	良好	灰色	灰色	
SI13	6	土師器	杯	(13.7)	-	(4.5)	□～体部の 1/3	緻密・赤色粒子	良好	浅黄褐色	褐色	
SI13	7	土師器	壺	-	7.5	(7.45)	底部完存	緻密	良好	赤褐色	暗褐色	底部木葉痕
SI13	8	土師器	壺	-	-	(4.0)	破片	緻密	良好	暗褐色	黒褐色	
SI14	1	土師器	杯	11.3	6.5	4.75	□～体部 1/3・底部完存	緻密	やや軟	明赤褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ・口縁部の一帯に炭化物付着
SI14	2	土師器	壺	(25.6)	-	(8.0)	破片	緻密	良好	にぶい赤褐色	明赤褐色	
SI15	1	須恵器	壺	(16.0)	-	3.9	1/4	緻密・白色粒子	やや軟	灰色	黄灰色	
SI15	2	土師器	杯	11.0	5.25	5.6	□～体部 3/4・底部完存	緻密・赤色粒子	軟質	褐色	明赤褐色	底部回転糸切り後外周をヘラケズリ
SI15	3	土師器	杯	(10.5)	(4.3)	(5.7)	1/2	緻密・赤色粒子	良好	褐色	褐色	底部回転糸切り後外周をヘラケズリ
SI15	4	土師器	杯	(11.0)	6.4	4.1	1/3	緻密・赤色粒子	やや軟	褐色	明赤褐色	底部全面ヘラケズリ
SI15	5	須恵器	高台付杯	-	7.4	(2.0)	底部完存	緻密・白色粒子	良好	灰色	青灰色	付高台
SI15	6	須恵器	高台付杯	-	9.2	(2.6)	底部完存	緻密・白色粒子	やや軟	灰褐色	黄灰色	付高台
SI15	7	土師器	壺	21.4	-	(5.9)	破片	緻密	良好	赤褐色	赤褐色	
SI15	8	土師器	壺	(21.4)	-	(8.0)	破片	やや粗	良好	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ロクロ成形
SI15	9	土師器	壺	-	-	(7.6)	破片	やや粗	良好	明赤褐色	明黄褐色	ロクロ成形

第6表 遺物観察表(5)

遺物名	番号	種別	標榜	計測値 (cm)			残存率	胎土	焼成	色調		形状 / その他
				口径 (長さ)	底径 (幅)	體高 (高さ)				外側	内側	
SI15	10	須臾器	壺	-	-	(16.0)	破片	緻密	良好	暗灰 黄色	灰色	外面全面に自然釉
SI15	11	須臾器	壺	-	-	(19.6)	破片	緻密	良好	灰オリ ープ色	灰色	外面全面に自然釉
SI15	12	須臾器	壺	-	-	(9.3)	破片	緻密	良好	灰オリ ープ色	灰色	凸帯
SI16	1	土師器	杯	(12.8)	4.4	3.6	右下二から五 部欠す・口縁 部の一部遺存	緻密 ・赤色粒子	良好	にぶい 黄褐色	灰色	底部全面ヘラケズリ
SI16	2	土師器	杯	12.25	4.4	3.9	□~体の2/ 3・上部欠す	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
SI16	3	土師器	杯	(13.7)	-	(4.4)	破片	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	褐色	
SI16	4	土師器	杯	14.3	5.25	4.6	口縁部の 1/2欠	緻密 ・赤色粒子	良好	にぶい 黄褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
SI16	5	土師器	杯	(13.4)	(5.6)	4	破片	緻密 ・赤色粒子	良好	浅黄 褐色	にぶい 黄褐色	底部全面ヘラケズリ
SI16	6	土師器	杯	(15.7)	-	(3.7)	□~体部の 1/3	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	浅黄 褐色	
SI16	7	土師器	杯	(13.6)	-	(4.0)	□~体部の 1/4	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	褐色	
SI16	8	土師器	皿	(12.6)	(4.5)	2.1	1/3	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
SI16	9	土師器	皿	12.6	3.9	2.8	完存	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	にぶい 赤褐色	底部回転糸切り帯一部をヘ ラケズリ・内面に炭化物付着
SI16	10	土師器	皿	(12.4)	(4.0)	2.5	1/3	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	褐色	口縁部全面にカーボン 附着
SI16	11	土師器	羽釜	(16.2)	-	(4.3)	破片	緻密	良好	褐灰色	黒褐色	
SI16	12	土師器	羽釜	(23.8)	-	(7.8)	口縁部の 1/3	やや粗	良好	赤褐色	褐色	
SI16	13	灰釉陶器	壺	(11.6)	-	(3.2)	破片	緻密	軟質	白色	淡黄色	
SI16	14	土師器	壺	(28.2)	-	(17.1)	□~体部の 1/4	緻密	良好	明赤 褐色	赤褐色	
SI16	15	鉄製器	鏡	13.5	2.2	1.3	ほぼ完存					
SK02	1	土師器	皿	11.5	1.8	2.4	2/3	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
SK02	2	土師器	皿	12.75	2.5	2.65	1/2	緻密	良好	褐色	褐色	口縁部全面ヘラケズリ・口縁 部全面にカーボン附着
SK02	3	灰釉陶器	碗	(16.0)	-	(3.7)	破片	緻密	良好	灰白色	灰オリ ープ色	
SK02	4	土師器	鑿り口	-	-	(4.0)	破片	やや粗	良好	灰色	褐色	
SK03	1	土師器	杯	(11.8)	-	(2.7)	口縁部の 1/3	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	褐色	内面に炭化物付着

第7表 遺物観察表 (6)

遺物名	番号	種別	器種	計測値 (cm)			残存率	胎土	焼成	色調		形状/その他
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (高さ)				外部	内部	
SK03	1	土師器	杯	(11.8)	-	(2.7)	口縁部の 1/3	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	褐色	内面に炭化物付着
SK03	2	土師器	皿	(12.3)	(4.4)	2.25	1/3	緻密 ・赤色粒子	良好	浅黄 褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
SK03	3	土師器	皿	(11.8)	5.1	2.2	口縁部1/ 3・底部1/ 3から底部まで	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	褐色	底部回転ヘラケズリ
SK03	4	土師器	皿	(13.6)	(4.8)	2.6	1/3	緻密 ・赤色粒子	良好	にぶい 褐色	灰褐色	底部全面ヘラケズリ
SK03	5	土師器	皿	(13.0)	(5.6)	1.8	1/2	緻密 ・赤色粒子	良好	明黄 褐色	褐色	底部全面ヘラケズリ
SK03	6	土師器	壺	(26.0)	-	(8.8)	破片	緻密	良好	赤褐色	にぶい 赤褐色	底部木葉痕
SK03	7	土師器	壺	-	(10.0)	(7.9)	底部1/2	緻密	良好	にぶい 赤褐色	褐色	
SK04	1	土師器	杯	(12.2)	4.8	3.3	口~体部1/ 3・底部残存	やや粗 ・赤色粒子	良好	褐色	にぶい 褐色	底部全面ヘラケズリ
SK04	2	土師器	皿	(13.0)	(4.0)	2.7	口~体部の 1/3	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	明赤 褐色	
SK04	3	須恵器	壺	-	(9.6)	(4.5)	破片	やや粗 ・黒色粒子	良好	オリ ブ黄色	灰色	底部未調整
SK04	4	土師器	壺	-	-	(2.8)	破片	緻密	良好	灰褐色	にぶい 褐色	
SK04	5	土師器	壺	-	-	(4.3)	破片	緻密	良好	明赤 褐色	明赤 褐色	
SK04	6	鉄製品	不明	(9.6)	4.0	1.2	ほぼ完存					
SK05	1	土師器	杯	-	-	(3.6)	破片	緻密 ・赤色粒子	良好	褐色	褐色	
SK05	2	土師器	杯	-	-	(1.4)	破片	緻密 ・赤色粒子	良好	浅黄 褐色	浅黄 褐色	
SK06	1	鉄滓	-	9.3	7.0	3.3	完存					

第8表 遺物観察表(7)

第4章 総括

今回の調査は、その調査原因が農道建設に伴うことから6.0～10.5mという狭小な幅に限定された調査であったにもかかわらず、先に示したとおり平安時代の竪穴住居址16軒、溝5条、土坑19基といった数多くの遺構および該期の遺物を検出するに至った。遺跡の分布は、5区に分けた調査区の内、北寄りに位置する4区に集中して発見されており、ここでは遺構の多くに切り合い関係が認められ、遺構の分布が局所的にはあるが濃密であったことがうかがえた。

山梨県において、平安時代の上器の段階区分や年代観は、1980年代以降、検討が繰り返され精緻さを加えているが、今回の調査において検出された遺構のうち、その時期をある程度明らかにし得る遺物を得た遺構の変遷を、南アルプス市に隣接する韭崎市の宮ノ前遺跡の土器編年観（櫛原 1992）をもとに示せば、9世紀前半から半ば頃の遺構として、SI14・SI15。9世紀後半代にSI02・SI06・SI08・SI13・SK03・SK05。10世紀前半から半ば頃としてSI03・SI04・SI05・SI07・SI09・SI10・SI11・SI12・SI16・SK02・SK04。10世紀後半代としてSI01を挙げることができる。

なお、今回の調査では、遺構覆上はもちろん包含層においても、検出された遺構群の時期を遡る遺物や、検出された遺構の時期以降の時代の遺物は全く検出されなかった。したがって、今回の調査地点においては、9世紀前半から半ば頃に突如として集落の展開がはじまり、10世紀前半から半ば頃に最も盛行し、10世紀後半代には急速に衰えていったことが看取される。

本調査地点の西側に位置し、南北840mにわたって遺構の検出が見られた本遺跡の甲西バイパス地点（県名称：百々遺跡）においては、その調査の結果から10世紀前半頃の水害によりその南半が放棄され、これ以後その部分に集落が展開しないことが明らかにされており、遺跡領域の南半に位置する今回の調査地点の様相も、これと機を一にした事象と捉えられる可能性があるが、一方で10世紀後半の集落の縮小傾向は、汎甲斐国的に見られる現象でもあり検

討を要す。

また、集落の萌芽がみられる9世紀の中頃は、八ヶ岳南麓地域をはじめとして、汎甲斐国的に集落の飛躍的増加（＝開拓志向）がみられる時期として指摘されている（萩原 1986・保坂 1997）。御勅使川扇状地の他の地域においても、扇端の湧水線に沿って連続と続いてきた遺跡から、新たなフロンティアとしての扇尖地域への開拓志向が一気に高まる時期であり（田中 2002・保坂 1990）、本調査地点の集落の成因を考える上でも考慮したい。



前記のとおり、今回調査対象とした範囲において、検出された遺構の分布は均一ではなく、特に人間生活の拠点となる住居址については、調査区北半にその分布が限られ、遺構分布に偏りがあることが明らかとなった（第53図）。

ところで、今回調査の原因となった、畑地帯総合整備事業白根地区の農道1号線は、南アルプス市在家塚から上八田まで、御勅使川扇状地上を南北に貫く新設の農道である。

南アルプス市教育委員会では、その建設に先立ち、平成17年度から、建設事業の進捗に伴い断続的に埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査を実施してきた。農道建設に伴う調査範囲は、前記のとおり極めて限定的な幅に限られる反面、長い延長を調査するため、平成17年度から断続的に実施されてきたこの試掘確認調査によって、御勅使川扇状地扇尖部を切り開く長大なトレンチが入られたという見方もでき、当該地域における遺跡の分布を探る上で重要なデータが蓄積された。

実施してきた試掘調査では、御勅使川南流路推定範囲の左岸側においては、これまで古代の遺跡が発見されていないことから、その有無確認を、御勅使川南流路の両岸では古代の護岸、治水関連遺構などの検出を念頭に調査を実施してきたが、遺構・遺物とも検出にいたらず、遺跡の成立を阻む御勅使川南流路の右岸側への影響を強く看取する結果となった。

一方御勅使川南流路右岸側においては、百々・上



第53図 発見された遺構の分布

八田遺跡の甲西バイパス地点において、南北840mにわたり、非常に大規模に遺構が検出されている状況に鑑み、今回の農道計画地内においても、全域で途切れなく遺構の検出を見るものと推察された。

しかし、これに反して結果は、今回調査を実施した範囲内においても遺構の分布は濃密だが局所的であり、平成20年度に計画範囲北端部分で実施した試掘調査によって、今回発掘調査を実施した範囲以北に遺跡の領域が広がらず、少なくとも北側約90m以上は遺跡が分布しないことも明らかとなった。

したがって、今回の調査では、上八田領域内のひとつの古代集落単位の南北の規模が確認されるとともに、集落が古代に御勅使川の本流であった御勅使川南流路の河岸に沿って帯状に展開していた可能性が明らかとなったことに加え、本調査地点が、遺跡

の性格として、マクロに見ればこの領域の古代集落の一角としてみることができると、領域としては、甲西バイパス地点の調査成果が予想させる広汎な遺跡領域の一部に含まれるものではなく、空閑地を挟み領域を異にすることが明らかとなった(第54図)。

この領域から広範に発見される該期の遺構が、しかしこのようにこの領域全域にその分布があるわけではないことが近年の小規模な調査の蓄積によって明らかになりつつある。今後とも、このような調査の積み重ねによって、古代の人々のこの領域における生活空間のとりかたの様子がより鮮明に浮かび上がってくるのが期待される。遺跡のひろがりと共に、遺構の存在しない空閑地を明らかにすることは、古代の環境や、ひいては遺跡集落を支えた生業のあ

り方などを考えるヒントともなる。

◆
今回の調査地点の占地する、南アルプス市上八田において、平安時代の遺構確認面の土質は粘土質であることから、古代上八田は早魃地帯ではなく、その後の水害による砂礫の堆積により、早魃地帯となったという見方もあるが、御勅使川扇状地扇央では、近世～近代を通じて、灌漑問題（そもそもいかにして、ここまで引水してくるか）を解決できなかった。御勅使川扇状地では、たとえ水田耕作が可能な土壌であっても、近世の用水開削をまたなければ、一定規模の水田開発が不可能であったし、また近世を通じて扇状地上の全域への灌漑というソリューションは見つけられず、その抜本的な解決は戦後スプリンクラー網の敷設を待たなければならなかった。

たとえ、近くに川があっても、御勅使川からは安定して水を得ることはできない。近代の水堰もそこからの取水を避けているとおり[※]、川幅は広くとも扇状地河川である御勅使川は、水田等の灌漑に用いるような安定した水量を計算できる河川ではない。したがって古代、本調査区が南面する御勅使川南流路に本流があっても、そこからこの地域を豊かな水田景観に転化するだけの安定した水量はやはり望めなかったものと推察される。

しかし、甲西バイパス地点や今回の調査区を含む平安時代の大规模遺跡「百々・上八田遺跡」は維持された。

ところで、近世の上八田村は一人あたりの生産石高が、0.5石以下と、巨麻郡西部筋で一人当たりの石高が最も低い村のひとつであり、水田皆無の畑作村でありながら、村落の規模は他の西部諸村と比して決して小さくなかったことが知られている。水田村落にくらべて、土地生産性が低く、村落の存立基盤が決して充分とはいえないにもかかわらず、大規模な村落が立地し、しかも近世後半にかなりの戸口の増加が認められた。

近世を通じこの早魃地域を支えたのは農業ではなく実は、活発な商業活動であったことが近年明らかにされているが（溝口2002）、近世と環境の変わらない古代御勅使川扇状地における大規模な集落群



第54図 想定される遺跡のひろがり

営についても、やはり農業以外の生業を想定したい。

甲西バイパス地点において大規模な集落跡から、100頭を越すと推定される牛馬骨が発見されたことをはじめ、この地域に遅くとも中世には「八田牧」と呼称された「牧」が設けられていたことが知られることに鑑みれば、やはり当該地域における主要な生業として「牧」という存在を想起せざるを得ない。

このような立地下で古代大規模な集落が維持された。このことは逆に、古代の「牧」が、これだけの集落を支え得る装置であったことを暗示する。

◆
前記のとおり、9世紀中頃に始まる遺跡分布のインフレーション（＝開拓志向）は、八ヶ岳南麓をはじめとして汎甲斐国的にとらえ得る事象といえることができる。その中で、御勂使川南流路と前御勂使川に挟まれたこの領域における9世紀の開拓志向の現れ方が「八田牧」への萌芽であり、今回検出された集落址は9世紀中頃以降の遺跡の拡大過程で、域内に派生した集落と総括したい。

※ 江戸時代前期寛文10年（1670）開削され、御勂使川扇状地に多くの新田を拓いた碓氷「碓島堰」も、御勂使川からの引水を選び、御勂使川の下を暗渠によってパスし、その北側の釜無川から引水する。

参考引用文献

- 今福利恵 2004a 「御勅使川流路の変遷と地域の様相」『信玄堤の再評価 資料集』
- 今福利恵 2004b 「甲斐国巨麻郡における古代牧についての一視点」『研究紀要』20 山梨県埋蔵文化財センター
- 棚原功一 1992 「宮ノ前遺跡における奈良～平安時代の土器・陶器」『宮ノ前遺跡』菲崎市教育委員会ほか
菲崎市教育委員会ほか 1992 「宮ノ前遺跡」
- 田中大輔 2002 「第四章 総括」『溝呂木道上第5遺跡（第Ⅱ地点）』若草町教育委員会
- 萩原三雄 1986 「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」『山梨県考古論集』Ⅰ 山梨県考古学協会
- 八田村教育委員会 2001 「榎原・天神遺跡」『八田村文化財調査報告書』第3集
- 八田村教育委員会 2002 「徳永・御崎遺跡」『八田村文化財調査報告書』第4集
- 保坂康夫 1990 「第Ⅲ編 第1章原始・古代の遺跡」『若草町誌』若草町
- 保坂康夫 1997 「山梨県下の遺跡・住居址数変動と通史的理解」『研究紀要』13 山梨県埋蔵文化財センター
- 溝口常俊 2002 『日本近世・近代の畑作地域史研究』名古屋大学出版会
- 南アルプス市教育委員会 2005 「平成15・16年度埋蔵文化財試掘調査報告書／百々・上八田遺跡」
『南アルプス市埋蔵文化財調査報告書』第10集
- 南アルプス市教育委員会 2011 「坂ノ上姫神遺跡 第2地点」『南アルプス市埋蔵文化財調査報告書』第27集
- 山梨県埋蔵文化財センター 2002 「百々遺跡1」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第201集
- 山梨県埋蔵文化財センター 2004 「百々遺跡2・4」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第212集
- 山梨県埋蔵文化財センター 2004 「百々遺跡3・5」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第213集
- 若草町教育委員会 1998 「角力場第2遺跡」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第1集
- 若草町教育委員会 2002 「向第1遺跡」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第3集
- 若草町教育委員会 2003 「溝呂木道上第5遺跡（第Ⅱ地点）」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第4集



調査地点遠景 (南より)



調査区遠景 (南より)



調査区1区全景 (南より)



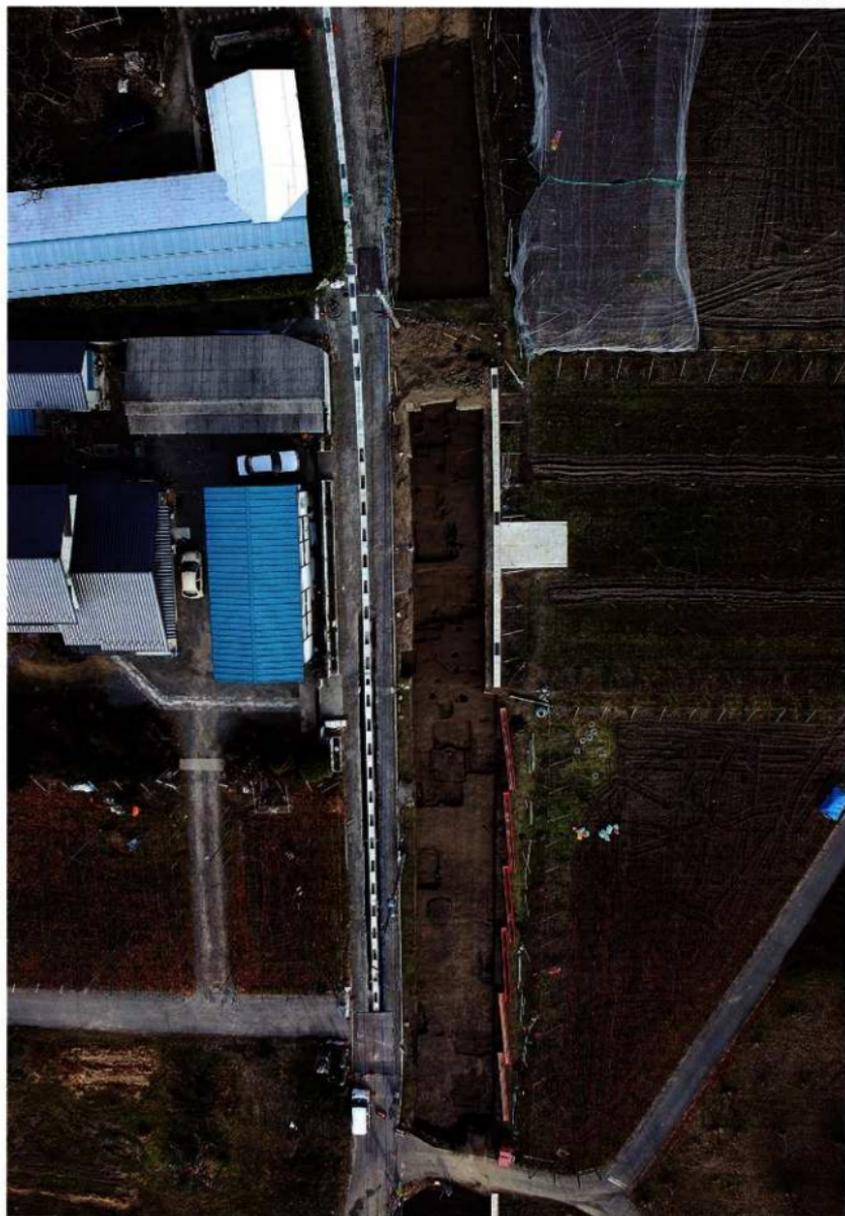
調査区3区全景 (南より)



調査区2区 東側トレンチ調査状況 (北より)



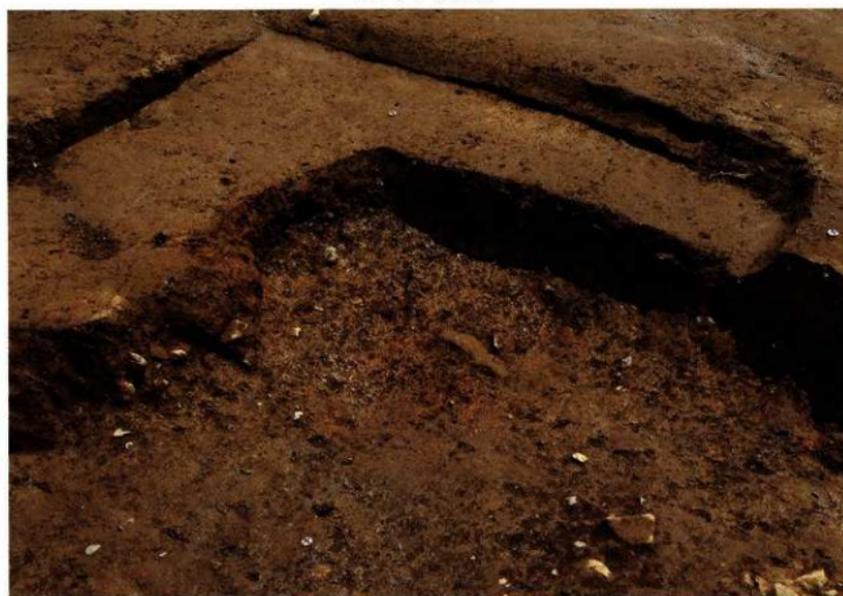
調査区2区 東側トレンチ土層積積状況



調査区4区・5区全景（上方が北）



S101 (西より)



S101窟 (北西より)



S102 (西より)



S102 遺物出土状況 (西より)



S103 (西より)



S103 竈 (西より)



S104 (西より)



S105 (西より)



S105 竈 (西より)



S106・SK06 (西より)



S106竈 (西より)



S107 (北より)



S107 竈 (西より)



S108 (北より)



S108竈 (西より)



S108 遺物出土状況（北西より）



S108 遺物出土状況（北西より）



S109 (西より)



S110 (北より)



S111 (南より)



S111竈 (南より)



S112 (西より)



S112窟 (北西より)



SI 13 (北より)



SI 14 (西より)



SI114遺物出土状況（西より）



SI115（西より）



S115 竈 (西より)



S116 (西より)



S116竈 (西より)



SK02 (東より)



SK03壺 (東より)



SK04・SK05 (北より)



SD04・05/SK09~12・15~16 (西より)



SK09 (西より)



調査風景



SD02 (東より)



SD01 (西より)



SD03 (南より)



SD03土層堆積状況 (南より)



SI01-2



SI05-1



SI05-5



SI06-1



SI06-2



SI07-1



SI07-2



SI07-3



SI07-4



SI07-6



SI08-1



SI08-2



SI08-3



SI08-4



SI08-6



SI08-8



SI08-9



SI08-11



SI08-13



SI08-15



SI08-16



SI09-2



SI11-2







SI16-12



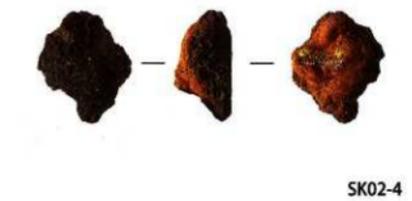
SI16-10



SK02-1



SK02-2



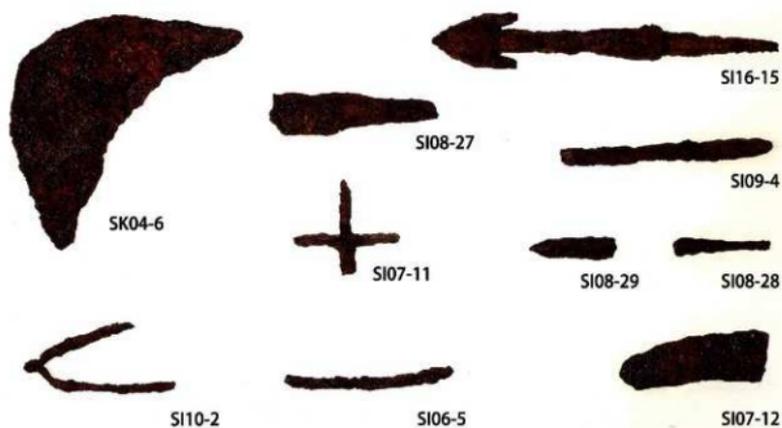
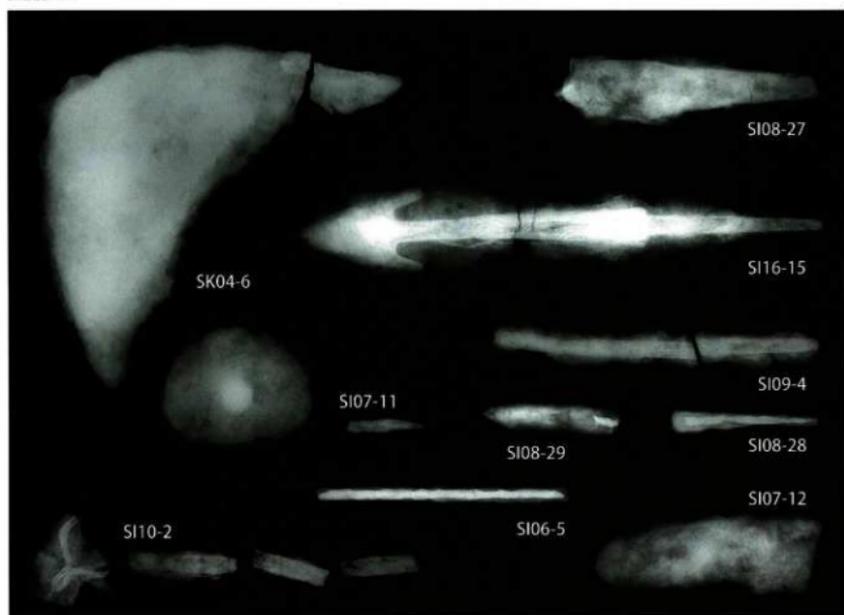
SK02-4



SK03-3



SK03-7



報 告 書 抄 録

ふりがな	どうどう・うえはったいせき
書名	百々・上八田遺跡
副書名	畑地帯総合整備事業白根地区農道1号線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第32集
編著者	田中大輔
編集機関	南アルプス市教育委員会
所在地	〒400-0492 山梨県南アルプス市鮎沢1212 TEL055-282-7777
発行年月日	西暦2012年3月30日

ふりがな	どうどう・うえはったいせき	
所収遺跡	百々・上八田遺跡	
ふりがな	やまなしけんみなみあるぶすしうえはったちない	
所在地	山梨県南アルプス市上八田地内	
コード	市町村	19208
	遺跡	SN-3
1/25000地図名	小笠原	
位置	北緯	北緯 35° 39' 08" (Japanese Geodetic Datum2000)
	東経	東経 138° 28' 46" (Japanese Geodetic Datum2000)
標高	324 m	
調査期間	20100802~20100904 / 20101018~20101224	
調査面積	1360㎡	
調査原因	農道建設	
種別	集落址	
主な時代	平安時代	
主な遺構	竪穴住居址16軒 土坑19基 溝5条	
主な遺物	土師器 須恵器 灰釉陶器 鉄製品(紡錘車・鎌・刀子等)	
特記事項	御勅使川扇状地上に占地した平安時代の集落址。古代、御勅使川の流路であった所謂御勅使川南流路に沿って遺構が分布することが明らかになった。	

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第 32 集

百々・上八田遺跡

知地帯総合整備事業 白根地区農道 1 号線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012 年 3 月 30 日 発行

編集発行 南アルプス市教育委員会
〒 400-0492 山梨県南アルプス市鮎沢 1212
電話 055-282-7777

印刷 株式会社サンニチ印刷
〒 400-0058 山梨県甲府市宮原町 608-1
電話 055-241-1111

